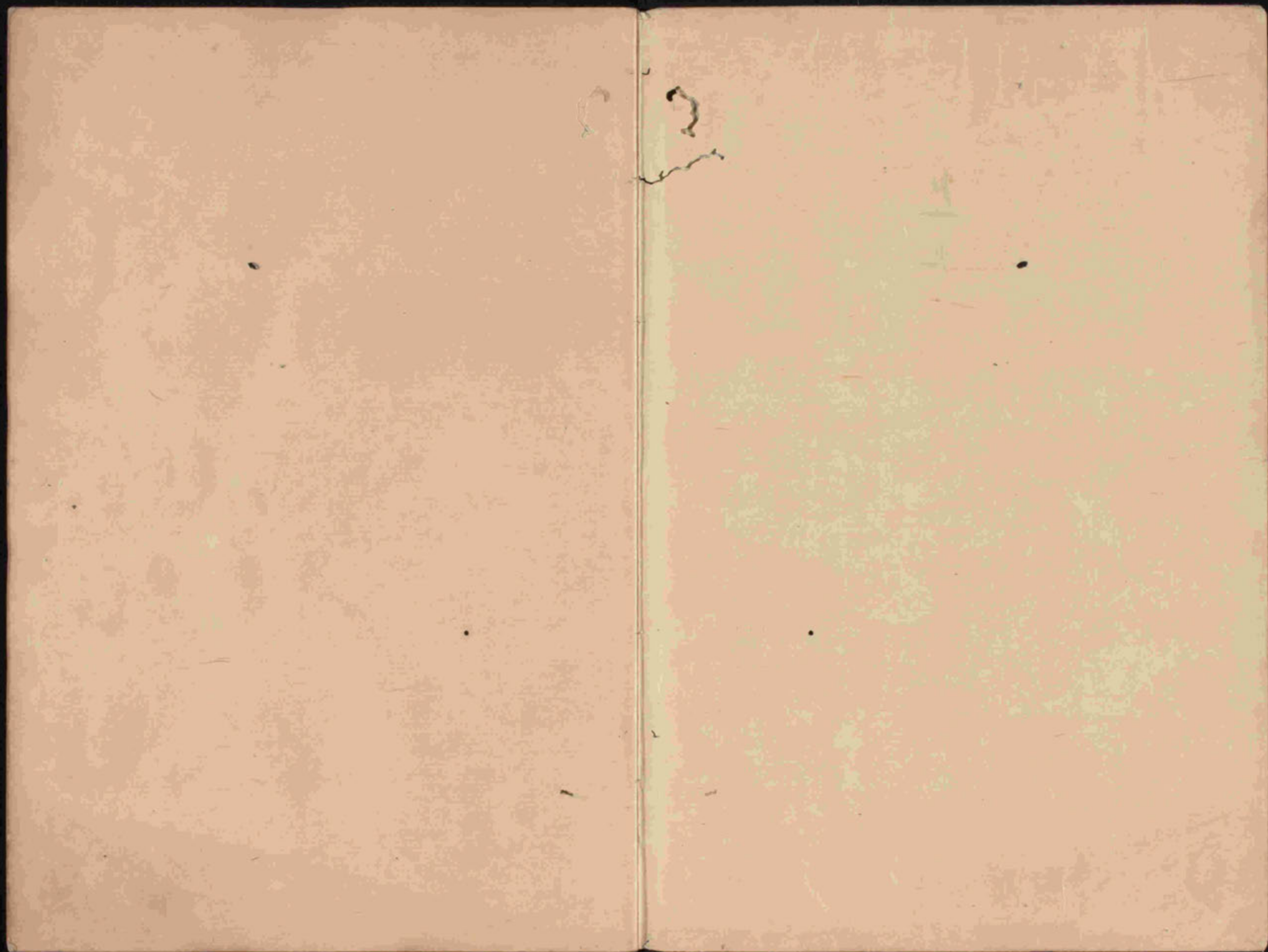
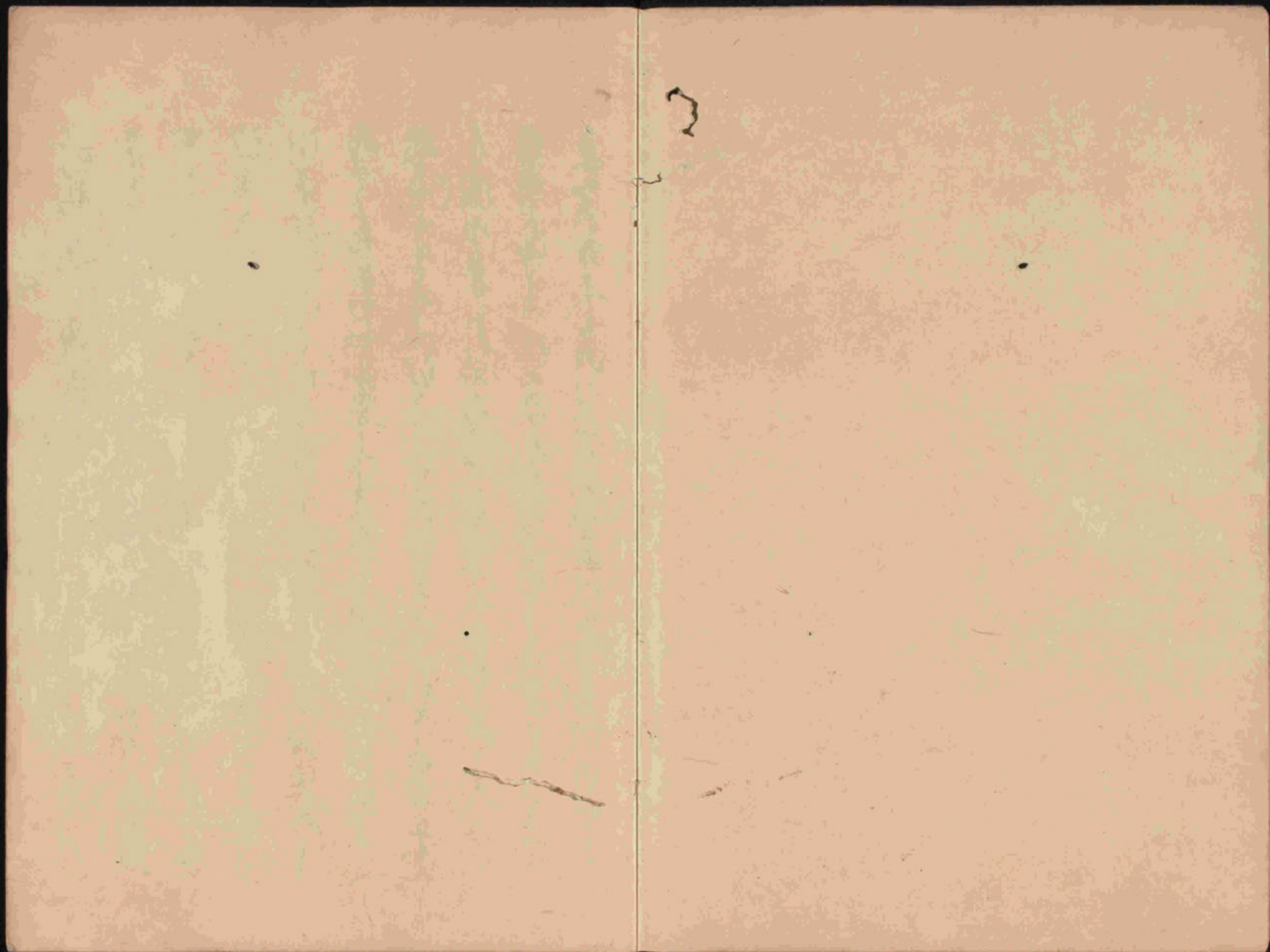


新勅撰和歌集





新勅撰和歌集

とく〜このみ〜のつ〜を〜うき〜はりりて我國^{わがくに}に
すま〜う〜を〜ら〜ふ〜に〜のむ〜し〜
り〜よ〜あ〜し〜ま〜わ〜く〜す〜のほれす〜い〜せ〜
に〜に我つ〜し〜ゆる古今後撰と〜にの集の〜
あ〜と〜か〜や〜を〜し〜よ〜か〜す〜く〜て〜わ〜に〜あ〜ま〜る〜こ
に我ゆら^{おのれ}を〜し〜じ〜〜こ〜し〜い〜ま〜し〜い〜うの各^{おのれ}が
く因^よゆ^ゆと〜あ〜乃^な人^{ひと}女^{むすめ}書^がの〜人^{ひと}よ^よめ^めと我^わて^て久^{ひさ}く
の月^{つき}〜ゆ〜に我^わら^らこ^こも^も〜の〜し〜ま〜ら^らい^いま^まえ
よ^よま^まい^いち^ちら^らわ^わ〜い^いか^から^らぬ^ぬま^まれ^れち^ちら^ら白^{しろ}河^{がは}の^のか^か〜

〜き^きは^はせ^せ〜し〜け^け〜し〜ぬ^ぬ〜こ〜ぬ^ぬ〜し〜の^のま^まと
ぬ^ぬい^いて^てち^ち〜う^うら^らあ^あ〜ま^まれ^れち^ちよ^よ〜い^いあ^あ〜と^とぬ^ぬい^い
〜と〜先^ま後^ご拾^し遺^いを^をえ^え〜く^くら^らと^とぬ^ぬ〜い^い〜と^とあ^あつ^つ
け^ける^るよ^より^り〜は^はつ^つ〜る^るあ^あ〜先^まち^ち〜と^と志^し路^ろ〜も^も〜
よ^より^りの^のこ^こ〜う^う風^{かぜ}あ^あま^まり^り女^{むすめ}春^{はる}放^{はな}可^かの^の海^{うみ}〜に
〜と^とち^ちよ^よ〜と^とぬ^ぬま^まに^にち^ち〜に^にの^のみ^みら^ら民^{たみ}の^の草^{くさ}葉^は
〜と^とち^ちよ^よ〜と^とぬ^ぬこ^こ〜つ^つか^か葉^は〜の^のみ^み〜に^に我^わつ^つ〜と^とぬ^ぬ
こ^こら^ら娘^{むすめ}草^{くさ}の^のみ^み〜ら^ら〜と^とぬ^ぬこ^こ〜と^とぬ^ぬひ^ひ〜と^とぬ^ぬつ^つ鳴^な
又^{また}〜と^とぬ^ぬは^は〜し^し〜こ^こ〜い^いあ^あ〜ま^まに^にぬ^ぬ〜と^とぬ^ぬ〜と^とぬ^ぬ〜と^とぬ^ぬ
ち^ちら^ら〜と^とぬ^ぬ天^{あま}曆^{りき}乃^のじ^じ〜時^{とき}す^す〜と^とぬ^ぬ〜と^とぬ^ぬ〜と^とぬ^ぬ〜と^とぬ^ぬ

たよりにてかゝるにふくまはるるをよむる事あり
又寛政貞永のいまだ世にまかりし人ふくまはるる事
しとのいふまじき事ありしや先よしとてははらじき
らへるるをよむる事ありしや先よしとてははらじき
作のよむるにいつくせうにあらはれよむる事あり
るもよむるにいつくせうにあらはれよむる事あり
てよむるにいつくせうにあらはれよむる事あり
をよむるにいつくせうにあらはれよむる事あり
るもよむるにいつくせうにあらはれよむる事あり
よむるにいつくせうにあらはれよむる事あり

毛の所世をいつくせうにあらはれよむる事あり
ちのいれをいつくせうにあらはれよむる事あり
力の思いそのいふまじき事ありしや先よしとてははらじき
らへるるをよむるにいつくせうにあらはれよむる事あり
にいつくせうにあらはれよむるにいつくせうにあらはれよむる事あり
けく新勅撰和詩集とていつくせうにあらはれよむる事あり

新編撰和歌集巻第一

春哥と

うのよのこごも年たうらよめり春こしんを
いづまにけけらにわくに

御歌

法興

あしとれ年とくもくくに春の霞りあう電よとれ
春の歌うくよみけけ

皇太后宮人夏後成

天のよわくもくもくも静と雲およむ秋春のよみ

延喜七年二月のし屏凡の元日雪のれ時

此貫

ふとわれみ雪一ふれ草と木も春てふよむる
淡人

冬とく春いきあし朝日と春日れし
久し乃天のくよみわく

春のりち西ち日草のわき

春のりち西ち日草のわき
京極前用白家肥後

いづまにけけらにわくに

大中権左宣朝夫

つ宿のよみ草のよみ

二美右大臣家屏風に

貫之

うふとちかきやぶらにさくら考のわが津もさくらに
は親も入道藤原白の家より十三年後
けつ富をよめり 持中納言後
うしむし乃鳴にさくらつ宿の垣の香にしほし
富のちをいづくらんをよめつけ

源後頼朝也

考うとちかきやぶら富のちのわつとさくらに
久世六年崇徳院より百首考つけり考也
南

徳賢門院堀川

考うとちかきやぶら富のちのわつとさくらに
前右親隆

前右親隆

松留つとさくら富のちのわつとさくらに
後徳久も左大臣十三年よりよめつけり遠村
考うとちかきやぶら富のちのわつとさくらに

皇太后文久後成

胡戸あきさしみの里も津にさくらに
古寛は親の家にも十首考つけり考也

是也法師

位より乃松の片わんかすしかりき里との考あれ明あの

源師克とら

しの紫しうもていしにいふりかいれついとせり考の紫櫻
百首ひゃくしゅ歌うたよ

式子しきしり祝いと

ふの海うみや萩のあをちに漕く舟ふねからもの考あのうららいり
後京極ごけいごく抄しやうぬた人将ひとしやうりに依よけりは百ひゃくそうよらと

八重やえ花はな六条むつじやう

月つきりくちなついるわいのくによし雲くもらくる考れあ明あの

歌うた一いつい

曾そ孫そんぬた忠ちゆう

掉お娘なのかともうこともうこともうこの氣きららいる考あれいか

このめじら考あのいをきこえれい萩はぎの衣しわりをちき

あらかのわかの松京きやう考あれい花はなの雪しみゆゆて
朝あさらいる掉お娘なをよしのけちていけて考あれいる考

山やま邊へ赤あか人ひと

ふししの雪ゆきうらいにいしつとしつよは何なに柳やなぎをしてしりかと

柳やなぎをよみ依けり

伊い珠たま

喜あ柳とのをいふりれる考雨あめりしていかけらむりしる考
あらみしつはいしる考青あお柳やなぎの衣はいきのはいらはるは

天曆てんりきはつ時ときは屏凡ひんぼんの考

中ちゆう略りやく

吹凡よみこれ也家^{きやう}の青柳^{あおやなぎ}のりくは^はえよれ^りるを

千又百番^{せんまたひゃくばん}言^い合^あふ 二条^{にじょう}流^{りゅう}讃^{さん}岐^ぎ

百^{ひゃく}又^{また}人^{ひと}ま^ま人^{ひと}の玉^{たま}か^かけ^けし^しと^とき^きく^くう^うあ^あむ^むく^くま^ま柳^{やなぎ}の^の糸^{いと}

考^{かう}の^の言^い流^{りゅう}は^はけ^ける^る 柳^{やなぎ}意^いは^は隆^{りゅう}衛^ゑ

そ^そち^ちを^をへ^へく^くの^のめ^めし^し今^{いま}の^の春^{はる}凡^{ぼん}の^の吹^ふく^くこ^こゆ^ゆる^る青^{あお}柳^{やなぎ}の^の糸^{いと}

寛^{かん}永^{えい}元^{げん}年^{ねん}十^{じゅう}一^{いち}月^{げつ}女^{にょ}脚^{きゃく}入^{いり}日^{にち}屏^{びん}凡^{ぼん}江^え上^{じやう}人^{にん}家^か

柳^{やなぎ}を^を流^{りゅう}は^はけ^ける^る 日^{にち}大^{だい}長^{ぢやう}

う^うら^らと^とへ^へて^て世^よの^の考^{かう}を^をし^し吹^ふ凡^{ぼん}と^と枝^{えだ}を^をあ^あら^らく^く思^{おも}ふ^ふ柳^{やなぎ}乃^の糸^{いと}

正^{せい}之^の位^ゐ家^か

し^し娘^{むすめ}六^む年^{ねん}の^のを^をあ^あら^らく^くす^すわ^わり^りけ^けて^て考^{かう}い^いく^くと^と思^{おも}ふ^ふ柳^{やなぎ}の^の糸^{いと}

考^{かう}の^の言^いこ^こえ^えよ^よみ^みは^はけ^ける^る

鎌^{かま}入^{いり}右^{みぎ}大^{だい}長^{ぢやう}

こ^この^の考^{かう}い^いく^く思^{おも}ふ^ふ柳^{やなぎ}の^の糸^{いと}を^をあ^あら^らく^く思^{おも}ふ^ふ

こ^この^のお^おわ^わら^ら胡^こけ^けの^の凡^{ぼん}よ^よか^かり^りる^る水^{みづ}の^の梅^{うめ}の^の考^{かう}の^のい^いく^くも^も

梅^{うめ}も^もを^を折^おて^て中^{なかつ}指^{さし}く^くし^しは^はけ^ける^る

九^く条^{じょう}大^{だい}長^{ぢやう}

し^しと^とや^やも^も思^{おも}ふ^ふ柳^{やなぎ}の^の糸^{いと}を^をあ^あら^らく^く思^{おも}ふ^ふ

流^{りゅう}は^はけ^ける^る 梅^{うめ}の^の花^{はな}を^をみ^みく^く流^{りゅう}は^はけ^ける^る

山^{さん}と^と徳^{とく}良^{りやう}

考^{かう}い^いく^く思^{おも}ふ^ふ宿^{しゆく}の^の梅^{うめ}花^{はな}を^をあ^あら^らく^く思^{おも}ふ^ふ

歌一子

九河内躬恒
いにれさうさてみゆる梅も枝もさうりよるれさうさ

凡よるさうにわさつ梅のむかへに里にききまき

亭子座う合よ 坂上元則

きりーの鳴うらひすのちる里ちりの梅の花を有

歌一子 式子に祝日

ゆづりぬさうさうわ梅の枝よる枝けり

持入納言家良

玉鉾の道のりての春凡よる里さう梅の枝けり

殿富門院人辨

許さくさうさう梅もわさう白ひを独詠さ

正三位家隆

く里の月のさうりも白く梅さうさうのさう凡

春のきして後休多 後京極持政麻呂叔父

ふまにさうさうの梅の花を春さうさう凡吹

七巻は祝日家又さうさうさうさう

寛延法師

春のく月さうさう思ひぬさうのさう白く梅さ

皇太后文久末後成

梅うめのはらものうらじはのあきはくく人のうらわらぬ考のう有り
高陽院の梅うめ花はなをかりくいりてはけけれい

大貳三三

いいく考のこれをなるに又屯のをかりくいり

ゆ

室治前用白を改大末

ええららいいにぬききああり梅花はなのうらわぬ考のう有り

家百言より大梅より小をよみ分けけ

前用白 道家云

梅うめのうらわぬ考のう有り月つきのうらわぬ考のう有り

後京極持政家の言今も嘆息を懐け

直輝門院丹後

春はる乃ののうらわぬ考のう有り月つきのうらわぬ考のう有り

百言よりけりけりは帰居をよめ

持中納言師は

ゆゆららいいのうらわぬ考のう有りをかりくいり

大納言師は

久ひさししのうらわぬ考のう有りをかりくいり

前大納言實賢

走はりくのうらわぬ考のう有りをかりくいり

後人より

白妙の彼海^{あまら}をてつ春^{はる}らる^{らる}後^{あご}月^{つき}吹^ふ向^むも^もと^と咲^さけり
中納言家成^{なかつなごんかぢ}の言^{こと}けけり。山^{やま}寒^{かむ}花^{はな}運^{はこ}こい
る^るをよみていりけり

後^{あご}京^{きやう}基^{もと}後^ご

かうの^{かうの}ふの^{ふの}いに^{いに}あ^あじと^{じと}つ^つむ^む下^{した}細^こさう^{さう}く^くが^がは
い^いけり

修理人^{しゆりじん}吏^し取^と書^{しよ}

新^{あらた}く^くあ^あの^のあ^あり^りさ^さみ^み海^{うみ}し^しに^に花^{はな}の^の枝^{えだ}が^がう^うら^らい^い花^{はな}
を^をい^いけり

持^も中^{ちゆう}納^{なつ}言^{ごん}書^{しよ}也^{なり}方^{かた}

花^{はな}田^た入^いり^りの^のあ^あら^らか^かる^るみ^みの^の吉^{きち}野^のの^の花^{はな}の^の名^なを^をい^いけり
寛治七年二月十日白河^{しろがは}院^{いん}の^のむ^むら^ら之^しに

お^おり^り甲^かけ^けの^の日^ひを^をい^いけり^{けり}尋^{たづ}花^{はな}の^のい^いら^らを^をい^いけり

久^く我^{われ}を^をい^いけり

山^{やま}極^{ごく}の^のあ^あら^らか^かる^るみ^みの^の花^{はな}の^のい^いら^らを^をい^いけり

右^{みぎ}后^ご門^{もん}基^{もと}後^ご

春^{はる}ら^らる^るゆ^ゆの^の花^{はな}の^のい^いら^らを^をい^いけり

山^{やま}極^{ごく}の^のあ^あら^らか^かる^るみ^みの^の花^{はな}の^のい^いら^らを^をい^いけり

山^{やま}極^{ごく}の^のあ^あら^らか^かる^るみ^みの^の花^{はな}の^のい^いら^らを^をい^いけり

皇^{みかど}后^ご門^{もん}基^{もと}後^ご

面^{おもて}鏡^{かがみ}の^のあ^あら^らか^かる^るみ^みの^の花^{はな}の^のい^いら^らを^をい^いけり

山^{やま}極^{ごく}の^のあ^あら^らか^かる^るみ^みの^の花^{はな}の^のい^いら^らを^をい^いけり

後京極持成前左大臣

しつめんのむねのむねいんくらのを春のよき命

兼連法師

いづりりむ笑むしよのし歌はわさうら春の白雪

かへ家よ女房百首う清い休けの日はさうこ

藤原成宗

花をたつし代考の朝りを花にらる春は白く

家よさうさう清い休けの日はさう

入道前左大臣

白すのなきしうくく笑むと所とさうと春の朝下の

百首う。

式子に親と

ちの研の尾上のこくく卒代は都のまきいんく

あわさうゆまのむしろ花のわさうはは猿人

家よ合よ雪間花ごころんを清いけ

前用白

あつちの雪ごころくゆらこの尾上の梅文らう

用白太夫

まゆより野の梅さうををらうら春のし

曲は周子

いづりりむ笑むしよのし歌はわさうら春の白雪

中宮女御

とく。ゆれむくものあつてはゆらゆらと揺れ
又治六年女御入内屏風。

後徳人古久大

花よりついでにうらつたお書のしくいよき
家より書かうよりとゆけるよ

後京極持政麻呂久大

春いろり楳さるりて雲もふけぬりの
清輔納家より書かゆける花より

後惠法師

みよのむのきこくまのうらむおもひをこつてゆめ
正治二年百三十一
皇令后宮人使後成

皇令后宮人使後成

雲より書かゆめりて花よりあつた
よ又百番り合よ。正三位家隆

くふと我のせし楳さるりて
あつてはゆらゆらと揺れ

新勅撰和歌集卷第二

春哥下

みこしよりありてゆけりほの御言

克孝天皇御歌

よこしらへたるのこがくも春歌にいりてほめてみよ

よこしらへたる

赤人 別語 赤人

みこしよりありてゆけりほの御言

つゆさ

梓弓の弓よふつよひはかこつよのまうたにちりけり

源重光

久しと考やほこわし思ふよのこころを雲りしそら

ふた末落こころんをよみかへら

橋原徳嗣

まこちね橋るりをつとをのよのふた末の

月ありて花よりこころんをよみかへら

和泉式部

いにしへのつとを考のく月も花のよみかへら

尋花をよみかへら

藤原仲納

つとを考のく月も花のよみかへら

百首言りけりけるよ

そつこい乃布しこの里いさくは尾上の橋雪は花

堀河院はあ女房とてしこのむしにわしに

しけり日談はる 権中納言俊忠

くふこをいしの橋いさうこみろくしはこにゆあを

権中納言時時

まゆり又てこのあしはむちろ里の人のちろを

後系敦兼納末

駒を先くむのあつこを尋じこのよゆは橋をうら

この日増坂ちて尋ふけり花のりしは

いしあ女車の花をかつのこしてふけれ

道のつらつらめらつてこの車のま

入をとふけり よみ人いあす

胡阿こ尋ふそきじら橋ちと虫狗のむれま

甲は村中官女房花見しけりける日花考

考友こしつらつをよとふけり

権中納言國信

花はあ外しのうの里人まこつ考をいさくし

甲はあ鳥好友日新章の日池上むこらんを

うらんとぬけりよ 中納言實隆

梅花^{うめ}に我が池のよみ我が波^{なみ}もくふりくさうけき

はねち入道前用白家^{しらかげ}と中^{なかつ}花^{はな}ごりくを

よきおけり 甚後

うらうら^{うら}袖^{そで}も白^{しろ}いしにうらうら花^{はな}のしにうらうら

寛平^{かんぺい}はほきつこのまはう合^あのき

讀人^{よみ}不知

春^{はる}ふりく年^{とし}いれ我^{われ}んち花^{はな}をわくくわ^{くわ}のた

是^{こゝ}處^{ところ}六年^{ろくにん}月^{つき}次^{つぎ}は屏^{へい}凡^{ぼん}三月^{さんげつ}うつす所^{ところ}

貫^{つら}る

白^{しろ}く今^{いま}にうらうら花^{はな}のかしはな^{はな}もかとう南^{なん}

左^{ひだり}無^な事^{こと}塔^た切^きは花^{はな}見^みもあつて又^{また}けり

けるね^ねす又 大^{おほ}貳^に三^{さん}位

後^{のち}みか花^{はな}のうらうらちりあつてなけこの外^{ほか}れ歌^{うた}も

後^{のち}冷^{ひや}泉^{いづみ}池^{いけ}は月^{つき}前^{まへ}落^{おち}花^{はな}といつらんをよりとね

うけり 大^{おほ}納^{のり}言^{ごん}師^し也

春^{はる}乃^のく月^{つき}くもくもく雪^{ゆき}梢^{しやう}のこもあつちり

建^{けん}曆^{りき}二年^{にねん}の春^{はる}日^ひ裏^{うら}は花^{はな}を合^あちり

く居^い春^{はる}曙^{あけぼの}といつらんを淡^{あは}ゆる

六^む条^{じょう}入^い道^{だう}前^{まへ}を政^{せい}人^{にん}也

月氣の梢よのこるよのくよ花と花のめる春のわをふの

指中納言長方

名もさる一草の片も雪ふるよ橋戸をわをほのえ

暮し花こころんをよとけける

藤原行朝
後京初納言

わすしち凡にけりぬまのよ一尺橋かかく我をよと

又すら言ちりけりよ花下送日こころんを

後京格格取麻呂人末

るつのおれゆ後くせしとつせしとつ花のけり

閑路花

逢坂の閑多とるよとら人のつと我も花の白波

歌
西行法師

凡吹は花の流るるこころとつとつ川のまに

あふれつ共くの春のもをさうめをらん後けりえん

指中納言長方

春凡のまなくゆりよつこの尾らよきゆるむの白毛

藤原白家言合よ雪同花こころんを後けり

右兼門格長家

ゆらゆらす橋とみすよ橋花のわつとよは志毛

藤原隆祐

か〜〜〜
中宮御三

舞の〜〜
建曆二年大正の花の〜

ゆ〜
人納言定通

大宰大貳重家うか〜
源師亮

桜花うの〜
鎌倉右大臣

桜花ち〜
ゆ大臣

〜
春儀雅行

春夜よの月〜
藤原行能納衣

〜
藤原院實朝衣

〜
殿富門院大輔

橋むちをわく我いひくすいに我の考もわがさす

花言淡依けり 前大僧心慈田

むゆふとしくろ人のつれ思ひまゝ考のやゆ凡
友花乃らり里こそあはけ我つとせし宿の考れ言りこ

後京極掎政前右大臣

花いふさつさのるにけりししてまよふけりまにまの
考研の尾とのれ考く我てのつとを松のゆらゆら

建保六年の裏言の合春奇

入道前右大臣

うしくくくくきふけ我考凡のやるとは定む花のふも里

歌一子

指大納言の實

山橋考れくみよに思我みう人命もむうちりけり
後京極掎政家言合よ遅日を淡依けり

梅憲俊兼宗

まのえとかくてやんくくく路共ゆる考のうら
堀河成成はわくこれわのらと橋のひかり枝よ
まををひきくくくを思ふつけのをみく後依けり

周防国

のつちなる重し花もあすく考のこゆりて思よけり
寛永元年女即入内屏向海邊わらむ所

ふに家隆

波凡とのしつちる世の考よあひくわものうへんふり
こしはせくはけらる考のよを成しよはけらる

本流は辰

雪あよとぬよけら小考上の歌よあしりしや
歳時春高サといらんをよはける

大江千里

年月よゆらうはるしとあしりし考にきかふるは
ふ又百番言ふ合よ
二考流横波
考乃のひりしりしといへん考の鳥のさしきり

春の言れり

入道麻呂大夫

白雪よゆらし花あしりし考はせの月うえはあはる
真子院言合よ

七考也しとわつしとれまし様も考はしわし我もまふ
春議取実の家言合よ

よみ人し

み忠人よいふしつらるのいふの言のいふの言
故郷款をこららんをよはける

皇太子大史後成

ありし言のいふ言のいふ言のいふ言のいふ言

く〜〜

鎌倉右大夫

ま〜〜わ〜〜の志〜〜人考して笑はらまのよ次のま

暮春のんを

入道二公祝とる助

馬〜〜か又ち〜〜春をねの〜〜は月〜〜我を我〜〜ものおと乳

もあて〜〜みあ〜〜つ〜〜宿よゆ〜〜のま〜〜地〜〜のま〜〜み

西乃うららのまのむ〜〜らんを淡休ける

後新納夫

る多れ〜〜の〜〜は神〜〜けてむ〜〜し〜〜し〜〜神〜〜し〜〜思〜〜

みす〜〜う〜〜け〜〜

高陽門を越前

より野〜〜に〜〜のま〜〜れ〜〜も折〜〜てゆ〜〜し波〜〜い〜〜こ〜〜

百〜〜言〜〜考〜〜の〜〜

前開白

ま〜〜ら考〜〜れ〜〜ま〜〜こ〜〜い〜〜し〜〜とあ〜〜す〜〜こ〜〜ま〜〜れ〜〜地〜〜のま〜〜浪

は家〜〜は百〜〜言〜〜淡休〜〜ける〜〜言〜〜のま〜〜れ〜〜

開白丸大夫

ふれ〜〜き〜〜け〜〜ら〜〜新〜〜のま〜〜ま〜〜わ〜〜れ〜〜つ〜〜ま〜〜成〜〜ら〜〜ま〜〜を〜〜ま〜〜ら〜〜考〜〜ら〜〜ふ

丸大夫

く〜〜の〜〜ま〜〜い〜〜ん〜〜し〜〜し〜〜さ〜〜く〜〜ね〜〜文〜〜く〜〜我〜〜こ〜〜ろ〜〜ま〜〜の〜〜ら〜〜れ〜〜

久世百〜〜言〜〜あ〜〜ち〜〜り〜〜け〜〜る〜〜時〜〜三〜〜月〜〜あ〜〜の〜〜

白を右官を史後成

ゆく考〜〜れ〜〜新〜〜の〜〜袖〜〜と〜〜川〜〜こ〜〜ま〜〜し〜〜り〜〜り〜〜り〜〜や

〜〜の〜〜ま〜〜り〜〜

新勅撰和歌集卷第三

夏哥

歌~~~~~

相換ウツク

新あらたの山やま路ぢよ志こころりこころとと西にし見みささりり春はるののここみみたたえ

二条天皇冬后山官大貳

夏衣なつぎううららふふととけけららふふままりり山やま郭かくららむむとと河か川がわ

友乃ともりりめめのの言ことしてしてよよみみけけらら

二条院皇太后夏志大貳

ふふいいままににいいははららふふけけ西にし島しま春はるははらら花はなををわわららひひかからら

家のいへのの言こともも首くび交まじのの言ことよよみみけけらら

蘇用白

ふすりの浪よりかたじけなくもや坂ののむ河の里

歌一節子よみ人

ふ早振かしのや月日居るをうといこうらじれて妻のうと

文治六年女卿入内屏風

後徳人ちた末

いふくふくふくのわねの妻草ゆのうをうけて年のいふと

寛治元年女卿入内屏風

指中納言言家

久このうたうかへは妻草ゆのうをうけて年のいふと

中納言の平家三郎

よみ人

佐里ののの枯れりてあまのうをうてふと

歌一節子田原天皇御製

秋をしのいとの枯れりてあまのうをうてふと

祐子の親と家化伊

園てとを成うゆとて郭ら鳴一あまのうをうてふと

郭ら鳴一あまのうをうてふと

はねも入道蘇用白を改め

よふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

歌一子

大智那好宗

いにのまうし里ふ我思しし所島くくを又月れりめし思た

延保六年の裏言今夏三

春儀雅経

りこか鳴や又月のおくを多しを多きて切うは

寛永元年女入の屏凡又月には高浦宮

こころ

前用白

るりこ江よくふわらうらうわつら草年式をきんむり

入道前左政介

幾も母ごころの信のあつら草もさるるりこころやむ

寛平の海きこいの文の言合れり

讀人不知

そりもへく又月のえをみことい休も草尖と緑へん

歌一子

いこい

りこかを多聞しよりわつら草かき多又月とちりり

ほりこころの言こころを換休けり

正二位家隆

郭ろこころ宿りりりあつら花くらむ又月とちりり

祝戸成茂

今りこころこころいこころを多島るつれりこの又月とちりり

白河院時人のまのこもきんくのまはら
ゆはくこのまけらぬまふとてうへは花
まをまつとをわたりけるこのまこへし
ふくすしこよみけけら

源師賢朝末

引くまこへいはいまこもくもをへんま
は

康賢之母

郭るらむのやして我てまもて車のかや
久安百まのちりける夏三

久安百まのちりける夏三

井のいふと我はほの郭るらむのまのま
皇太后文太史後成

うらわらるるかむらあまのまをほりて
十肯うちりける村 右衛門坊右近

まのまのまのまのまのまのまのまのま
文治六年女中入内屏凡

後徳久古た大夫

郭る雲のうらむらうていこもまのまのま
寛政元年十一月女中入内屏凡

右衛門坊右近家

ちつこい杜のしめ縄さうーわいさうい
 故マ孰るこいしんをよきゆけら
 指中納言も方

わ我よけらさじのまの孰るこ我こあまのしん
 後信雅も入道兼用白百さうよりとゆけら
 是れ月面をよきる 皇々后家人吏後成

ありうめいづくに成思すし何ゆうとまてん也又月
 又月面を淡体る 後徳也ちた人た

又月面よじじいしんし何柳り我千波の滝の白りし
 六条入道兼ち政大夫

こころ我よきかあまよきしん年かこまゆ松りし
 兼右近中将實威

又月面のしをわらぬにむまうまき若のまのわ水の
 丸を中将の衡

こころ我のしんぬれ澤田け袖にくりりあさこき
 源家も納言

うらとこくくくくくくくくくくくくくくくくく
 源家も納言
 寿定持大吏良実

梅乃きこもはにりりりりりりりりりりりりりりりり
 藤系也後納言

又月面をくくくくくくくくくくくくくくくくく
 藤系也後納言

歌一十

寛盛法師

みる月のやうにいとけり夕立のやうにぬきあはるるはなはけ

よみ人し

草のやうにわかれらるる若の燈のほよきし思ひきりあはれ

家よ又すまやう淡休けりし江草

入道二品祝王通助

白雲乃玉江の岸のよみくはぬ凡ちりゆはるるか

春議雅行

あよみわらわらくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

は成る入道前持政家三のちよ

冬之補親

夏の人々雪路にらるる成由と我うくく月のよみあはるる

夏月を淡休けり 正三位朝家

よしすくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

歌一十

如影法師

月あつた月のりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

石ふりくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

藤原實方朝夫

あやをけり外山のよきつゆりりりりりりりりりりりりりり

寛治元年女所入の屏凡杜邊山井海ら

あま所

正三位家隆

^{あま}あま

夕言に夏より外をゆく水のつくとの杜のほろ涼く
海邊松下り人納涼の所

正三位家隆

夏より外をゆく水のつくとの杜のほろ涼く

みる月らるるのちるるを

後京極持政兼左大臣

早の川のつらぬ水にみるるにわがはのまを

寛治元年女ら入り屏風

前用白

早の川のつらぬ水にみるるにわがはのまを

正三位家隆

見るるあまのふけの夕るる

みるるあまのふけの夕るる

新勅撰和歌集卷之第百

妹尋と

とけの娘の心をよとゆける

曾孫ね忠

久々のいづこの世もあをさくはありて嘆く娘の初凡

大納言師氏

かうこののりわいのり月夜にほもすくは日社をん死

大納言師氏

きのふはつらつしうふ吹凡のをしもそ娘はえよとて

妹尋

あはは師

むよあかこがれくじう野の草の葉は娘の初凡

正三尾家隆

善ゆらうのまふといふをてけうもる娘の初凡

右車門考家

そいそくへり吹也つる宿の萩のうは笑は娘の初凡

うのまのこも初秋の心をけりうはりけり

藤原資季納忠

まにのうらむにむにむをて吹りて娘はきあ

家は百もうよとゆけるは早娘の心を

開白左大夫

夏¹よりくつりつりつと成⁴也し夏より秋より冬⁶の故²也

曰大志

天に何れをあるまじゆらん夕言の書⁵式³多⁴よ故²也

夏京信實朝也

よ波のすくもわ⁷つ⁸ま⁹の神¹⁰師¹¹の浦¹²の故¹³の初¹⁴凡

よ夏百番¹⁵う¹⁶ち¹⁷よ 宜¹⁸故¹⁹門²⁰丹²¹波²²

ゆ²³く²⁴分²⁵京²⁶う²⁷と²⁸也²⁹神³⁰の³¹と³²由³³し³⁴と³⁵成³⁶を³⁷さ³⁸う³⁹ゆ⁴⁰故⁴¹也⁴²

は⁴³性⁴⁴も⁴⁵入⁴⁶道⁴⁷兼⁴⁸用⁴⁹白⁵⁰中⁵¹納⁵²言⁵³帝⁵⁴将⁵⁵と⁵⁶依⁵⁷け⁵⁸ら⁵⁹ほ⁶⁰し

家⁶¹早⁶²故⁶³こ⁶⁴し⁶⁵らん⁶⁶を⁶⁷よ⁶⁸り⁶⁹と⁷⁰依⁷¹け⁷²ら⁷³し

上⁷⁴京⁷⁵在⁷⁶良⁷⁷朝⁷⁸也

よ⁷⁹里⁸⁰の⁸¹す⁸²り⁸³の⁸⁴う⁸⁵と⁸⁶笑⁸⁷を⁸⁸吹⁸⁹く⁹⁰す⁹¹凡⁹²の⁹³く⁹⁴と⁹⁵よ⁹⁶故⁹⁷也⁹⁸

殷⁹⁹富¹⁰⁰門¹⁰¹凡¹⁰²人¹⁰³補¹⁰⁴之¹⁰⁵輪¹⁰⁶社¹⁰⁷と¹⁰⁸又¹⁰⁹そ¹¹⁰う¹¹¹く¹¹²後¹¹³

と¹¹⁴依¹¹⁵け¹¹⁶ら¹¹⁷し¹¹⁸故¹¹⁹也¹²⁰ 古¹²¹也¹²²門¹²³内¹²⁴也¹²⁵

故¹²⁶こ¹²⁷し¹²⁸の¹²⁹あ¹³⁰ら¹³¹の¹³²ま¹³³か¹³⁴り¹³⁵り¹³⁶ま¹³⁷う¹³⁸何¹³⁹ゆ¹⁴⁰ら¹⁴¹と¹⁴²思¹⁴³は¹⁴⁴ら¹⁴⁵る¹⁴⁶

と¹⁴⁷依¹⁴⁸け¹⁴⁹ら¹⁵⁰し¹⁵¹ 是¹⁵²れ¹⁵³は¹⁵⁴好¹⁵⁵也¹⁵⁶

櫻¹⁵⁷わ¹⁵⁸の¹⁵⁹り¹⁶⁰の¹⁶¹京¹⁶²を¹⁶³け¹⁶⁴こ¹⁶⁵と¹⁶⁶思¹⁶⁷は¹⁶⁸ら¹⁶⁹る¹⁷⁰を¹⁷¹故¹⁷²也¹⁷³

鎌¹⁷⁴倉¹⁷⁵右¹⁷⁶大¹⁷⁷志¹⁷⁸

夕¹⁷⁹言¹⁸⁰の¹⁸¹つ¹⁸²も¹⁸³す¹⁸⁴ら¹⁸⁵ぬ¹⁸⁶ま¹⁸⁷の¹⁸⁸お¹⁸⁹の¹⁹⁰れ¹⁹¹也¹⁹²の¹⁹³故¹⁹⁴也¹⁹⁵

ひ¹⁹⁶り¹⁹⁷の¹⁹⁸ゆ¹⁹⁹こ²⁰⁰わ²⁰¹ひ²⁰²を²⁰³結²⁰⁴久²⁰⁵の²⁰⁶わ²⁰⁷ま²⁰⁸れ²⁰⁹何²¹⁰ゆ²¹¹ら²¹²と²¹³思²¹⁴は²¹⁵ら²¹⁶る²¹⁷

殷²¹⁸富²¹⁹門²²⁰凡²²¹人²²²補²²³

かづこよりよりの橋をよそかづこに結つるよそに成はけり

は下駄田

天何ううねさこの娘はよみからの橋の中やうを

百三言やけりよ 宗徳院抄巻

天何やうとの波もじきわさうゆらさうかうの

清浦朝夫家よ言合しはけりよ 七夕の心をよ

みはけり 夏原敦仲

天何ううにの波もいりりの妻はくみかやうを

後三条院抄よ人のそのこも舟池也七夕

三言はけりよ 前中納言基長

思へもいりくよ有うらふ七夕のちよなつよなつはけり

法性寺入道藤原白家よく七夕の心をよみ

はけり 菅原良朝也

天何りわいのえもあいのこゆりやきさうさうよりの娘

宇治入道藤原白家よく七夕の心をよみはけ

りよ 持大納言経補

織女たづなのつらさうあわしを年よさひあははけり

百言言はけり娘言

よこ位家隆

草乃うへの春さけこのまじさのさめらふせし

七夕後朝の心をよそよほける

投中納言伊実

七夕天の河はさらさらのついでにのこりけりいそいで

後京清輔納言

天河水け草はよそよそとあつたわらわりの水の流るるを

八重隆左衛門

いづれにせむいづれにせむのけ凡そ七夕にや袖也と

麻大納言隆春

と宿りに娘の心を結えてもあつた心をこぼるるを

百首の中より 式子代祝

娘とていぬをさう思ふよのこりよこすも雲は夕言のそ

二重所潜岐

今よりの娘の心はないうもよもよも娘の心をこぼるるを

娘の心はないうもよもよも娘の心をこぼるるを 入道二重所潜岐

娘の心はないうもよもよも娘の心をこぼるるを

入道麻左衛門

娘の心はないうもよもよも娘の心をこぼるるを

相換

いづれにせむいづれにせむのけ凡そ七夕にや袖也と

大納言伊実

白雲に草葉をまきし煙のよを夢とすりてしわらね

秋言淡ゆけり
九道中将の衛

よんくのよのくまうこ月乳をわらりつるよね虫の夢

友京教雅胡た

か我そく後なるよをわらりよねころ人をまじ虫た

うのをのこも隣を森とらんをりしついで

けり
檀中約言隆親

くまこ一宿のわらこまきしついで月をわらね煙のよを

歌
よき人

白雲のちよくまきし葉の下紅葉衣とらんね煙のよを

此ころの煙をまきし葉のむらりて白雲をまきし

あすの何ゆきこの星の煙をまきしついで

柿本八丸

白雲に煙の花をまきしついで

祐子の親と家小弁

掉麻のおまきしゆけりまきのやわらね

白川流ありく野草露滋こいつらんをまき

いづりゆにまきし
大野つれ

つら衣霧のむすりなまきしついで

家と煙の奇よれとゆけり

録人者人夫

みらのへたまの夕弟^{ヨト}之入つとみささうゆえは娘^{むすめ}を
古郷のししあゝの娘いふつとみさ入命に笑つた也
後京基伝

とくしけのゆの娘^{むすめ}を笑しよ切に麻のちうねハ
雪居る瞻西上人言合し休けり

持中納言師母

初阿^{はつあ}とてあめとてをさし舞のむら^{むら}のちたふれ^{たふれ}た
持中納言師母言合し休けりよみささうゆえハ
しけり
按察使云爾

女席花^{にょせきばな}ちゆい^{ちゆい}のひと^{のひと}さけい^{さけい}はけり^{はけり}ふ娘^{むすめ}の凡

歌^{うた}しあ^あか^か 二重^{にじゆう}所^{しよ}積^{せき}波^な

こにゆき^{ゆき}と^と娘^{むすめ}のちと^{ちと}は女席^{にょせき}を^を想^{おも}ひ^ひかへ^{かへ}る^る休^{やす}け^けり

菅家万葉集言 よみ人しと

あめたり^{あめ}の^のち^ちれ^れま^まは^は女席^{にょせき}を^を人^{ひと}の^のん^んれ^れ娘^{むすめ}い^いと^とこ^こ

式部^{しきぶ}あ^あわ^わい^いの^のん^んれ^れ家^けは^はと^とゆ^ゆて^て

あう^{あう}い^いる^るし^し休^{やす}け^けり^り女席^{にょせき}を^をこ^こし^し孩^{わらわ}

休けり 三條右大臣

女席^{にょせき}を^をあ^あめ^めの^のち^ちれ^れま^まは^は女席^{にょせき}を^を人^{ひと}の^のん^んれ^れ娘^{むすめ}い^いと^とこ^こ

久^{ひさ}重^{しげ}百^{もも}三^{さん}言^{こと}ち^ちり^りけ^ける^る娘^{むすめ}哥^か

九京ふ美昭補

ついでにふすまののふふあつるあはじしとていさうひはり

歌一しあす

控申約言長方

こゝろをいふはよはすしむはるゆゑ人の心をよそ

春議雅行

もはる草の枝をうらうみく泪の家やまこととてわらふ

源具親納を

んをこ草の枝とむすこをいふあはぬ故はまよを

田を薄とていふをよみはけ

後京信實納を

まのけいとうへいはのいしはこりた思をうらまふ果

わら

田を美をよめを 後京成宗

いぬ乃凡のやうとてかり也とてけういふは庭の美京

歌一しあす

麻大儒正慈同

あはれを野とてかりけり難ハをよみてにうらまや

よき人しあす

あはれを清しとてし妹弟の後ゆいみゆを納ふのむ

月の言あまうらまはけり

後京権持政前を叙入下

白雪のゆりわらふうらまはけり月をいふらよとの月よ

控中納言御定中おし付けの御言合し付け
はし後うしろくりにけりけり月言

大炊左門右人老

天律えうく言くく人娘はく西きく寸めくよの月

歌しし寸

正三位家隆

うくく言くく控中の言まごおより元をよき出る月乳

延喜卯は八月十又九月宴言

源云忠朝下

いもくわくしこうくも娘のよの月れくういよひやあ

養和の比ひらりい百言言後うしろ付けの娘言

控中納言定家

天あの系思あへいりるまはる一娘くう月の言ありあけれ

家は百言言よと付けの月言

用白左人老

是引のよれ月言書きて引くつとせぬく娘のくれ月

月言うくよと付け

藤原資季朝老

みるゆくまのりやゆえくの月のかつて娘のおま

八月十又九月宴言

兼朝法師

大はるかによしのをきりおしし月よき月は書しは

豊康法師

かうおと娘のあつうとくはあつうよひのさる月し

後京極持収たふおと休けらば月又すまう後

休けらばよめう 持中細言定家

あを父杖のあつとあつうわつうく月のおしこの

月よよみ休けら 左中持基良

うらこのにうらうらうあつうとすま外わく月乳

持律師公猷

いづくもつえゆく雪のあつうわつと休あつうはたの月

中京師書

あつうとくやうしうあつうとくよのくわけては月乳

真昭法師

神のうへはあをさうりやとすうかたていよめ娘は月乳

開白左大夫家百首うよを休ける月言

藤原頼成切た

よをあつう野原のあつ神のうへは先うらわ娘のく月

入道二兵親と家又すまう後休けらばあ

月 正二位家隆

松の戸はあつうのよひは雪とわらあつうをみるは

文治六年女御入日屏凡日馬定所

後京極持政前を致す

東よりく小邊坂の山^山として都^都に^にじら^らら^らの^のこ^こま

和歌所^所の^の合^合に海邊^{海邊}梅月^{梅月}の^のこ^こま^まを^をよ^よみ

はけり
ふゆは

おきに^には^はけ^けの^の浦^浦に^には^はの^のこ^こま^まを^をよ^よみ^み梅^梅の^の月^月

百首^{百首}の^の月^月言^言 前^前周^周白^白

村中^{村中}乃^乃ま^まに^につ^つら^らな^なま^まの^のつ^つら^らな^なの^のつ^つら^らな^なの^のつ^つら^らな^な

う^うの^のま^まの^のこ^こま^まは^は海^海月^月の^のこ^こま^まを^をよ^よみ

に^には^はけ^けら^らつ^つめ^めし^し 所^所書^書

つ^つの^の浦^浦わ^わの^のこ^こま^まの^の鳴^鳴を^をよ^よみ^みは^はの^のこ^こま^まの^のこ^こま^ま

娘^娘言^言は^はけ^けら^らし^し 正^正三^三位^位家^家隆^隆

す^すの^のわ^わま^まの^のま^まし^しの^の夜^夜を^をよ^よみ^みは^はの^のこ^こま^まの^のこ^こま^ま

名^名所^所月^月を^をよ^よみ^み 後^後京^京極^極持^持政^政

つ^つら^らな^なの^のこ^こま^まの^のこ^こま^まを^をよ^よみ^みは^はの^のこ^こま^まの^のこ^こま^ま

白^白河^河院^院鳥^鳥羽^羽殿^殿の^のこ^こま^まを^をよ^よみ^みは^はの^のこ^こま^まの^のこ^こま^ま

こ^こま^まの^のこ^こま^まを^をよ^よみ^みは^はの^のこ^こま^まの^のこ^こま^ま

持^持政^政の^の言^言宗^宗通^通

志^志の^のお^お乃^乃門^門田^田の^のい^いぬ^ぬの^のり^りを^をよ^よみ^みは^はの^のこ^こま^まの^のこ^こま^ま

歌^歌の^のこ^こま^まを^をよ^よみ^み 藤^藤原^原道^道信^信納^納夫^夫

い〜〜お母の病を弟に代るのじろきよめと書けり

麻久信正慈田

よろろ〜〜いマの娘まうい〜切穿ちりし小山田の系

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

梅霧こころを 正三位知家

煙こころれこ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

歌〜〜〜 正三位家隆

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

西行法師

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

持康の妻

新勅撰和歌集卷之第又

妹尋下

寛平御時きこひの文代合平

讀人不知

妹のくのわよとてら月共えはいとく白彦を別し社み我
九月十三夜の月を別しつゝふりえとてあはれなる

能因法師

うらやまをせし指しは様かしくよみの月を昔みし

歌しあす

小野小町

妹の月いづる物もつらなるもしとちなるよりのそな

九月にこあつこあよみ休けら

選子の親と家宰相

妹乃くのなをこゆる草村は氣にいつひよのそ月

くまるこ月をなえあつてよみ休けら

通信初巻

いひこみなりえいかられと妹のくれ此わの月がとてま水

對月惜妹といつらんをよみ休けら

常京在良納巻

月ゆくのちつこあすつゝなむれとわ子と惜し妹のそ

秋のよみ休けらと 休後具定母

うゝ世に煇のまゝの居たかゝる所をこの世の月を

持家使兼宗

有明乃月の世のつらきことやし丁草葉の居る

丸道中持停年

みじろよと草をひけて西春に木の月の光りし

百首の中

後京極持政前を致大夫

真木のころして有明の成りをしよの月に向人

建保二年煇をちりけり

赤儀雅行

かゆ煇のつらきやいも更なる月をのりまじるを

正三位家隆

限われい切をんこすの鏡のまゝなることよの月を

入道二公親と家に煇月を淡休けり

持大僧都有果

凡そしと月をえうゆちけりよとの草又の煇は言

後京極持政百首の中とけり

小休辰

いづれくつとよの煇よわいせしるる月の光を詠て

八重隆六條

煇のくも思ふことのほろりいりて居けり

神

娘乃よんくらうんこんまんおんこんわんめんらんけん

京極前用白家肥後

娘た女たをたわたかたのたあたらたのたなたをたあたらたのたあたらた

うたのたあたらたのたあたらたのたあたらたのたあたらた

右素門塔為家

かたのたあたらたのたあたらたのたあたらたのたあたらた

寛平はほきたのたあたらたのたあたらた

よみ人下

あたらたのたあたらたのたあたらたのたあたらた

歌ん人丸ん

娘田たのたあたらたのたあたらたのたあたらた

船恒

妹たのたあたらたのたあたらたのたあたらた

兵部たのたあたらたのたあたらたのたあたらた

あたらたのたあたらたのたあたらたのたあたらた

とら子

かたのたあたらたのたあたらたのたあたらた

歌ん中納言家持

妹た乃たのたあたらたのたあたらたのたあたらた

鎌倉右大夫

雲のわら栴りるゝに舞こめしうゝのよは麻うちり

麻人信正慈回

しりしう此ころ物わられり我れ舞りりやうまをうみあま

う合しはけり上麻をよみはける

麻赤儀行盛

幸又く花のほちり同ゆりりお糸のあつしよめ花

建保六年四月裏言合放言

八条院なる人

つら菴をくくのふれちけれうまをまし鳴ぬれ

麻言うくよみはける

権中納言實也

大江のらうらにをくら麻のほりく野をちりて妻をうら

建保又二年四月唐申又り高放胡

六条入道前左大臣

大この放をわられこく麻の洞ちりりし野へのわら

洞を麻こりんをよみはける

正三位兼家

掉麻のわらゆり谷の埋は水けりこみく也妻をちり

歌しりす

如影法師

ふ麻の鳴れしや更しをうり花の後のふれま月

後冷泉院女このまに申ける母中に下のおま
のまかきりらりけり月わりのまよひに
おまけけり
大貳三位

いにしえのついでに月乳のまよひに
あつたはゆりけり此言のまよひに
まじりたるよう作らるるまよひに

権大納言長家

月乳はわりのついでに月乳のまよひに
康保三年の書事合ふ

天曆卯年

けりてはついでに月乳のまよひに
崇徳院月照菊花のまよひに
けり
右無事書云行

月乳のまよひに月乳のまよひに
按察使云通

月乳のまよひに月乳のまよひに
鎌倉右大臣

おれはわりの月乳のまよひに
入道二品親と通助

つゝ宿の夢の胡麻多しおしこころし白のあはれ

妹言淡ゆけり
捨入納言忠信

あつくともゆきそいさかあはれ宿の月夜をよめる人うらま

鎌倉右大臣

つゝの系八重の夜路よりふる月夜にむこのあはれ秋風うら

如願法師

月と鳴るのそはれこゆるよとををかきこしにうらま

真昭法師

花吹雪をふりしのあはれ衣ころよとこしの月とにや

掛衣のんをよとゆけり

そはれ好忠

衣のしきあはれはるをわたりは事とにやふる鳴る

貫らへ

つゝ衣のしきあはれ月夜をよとは思ふ人よと

久世百々言まけり娘言

皇太后宮大史後成

衣のしきあはれ月夜をよとあはれこころしにすのあはれ

百々言まけり娘言

入道麻衣女

凡そしきあはれの夜をよとあはれこころしにすのあはれ

前大納言隆房

今もこの世のわが身をいかにし月にもまじりて衣をいかに

歌一しと

承明門院小宰相

月のまじりて衣をいかにし月にもまじりて衣をいかに

月又十三年のよみかたけり

後京極持政前左大臣

引しつと祿のよきしよも我ら月をいかにし月にもまじりて衣をいかに

娘のよきかたけり

持大納言家良

白妙の月乃光をいかにし月にもまじりて衣をいかに

正三位家隆

白妙の月乃光をいかにし月にもまじりて衣をいかに

建保六年の裏の今娘の

よもいかにし月にもまじりて衣をいかに

百首の中に娘の 麻用白

よもいかにし月にもまじりて衣をいかに

よもいかにし月にもまじりて衣をいかに

娘の月吹まじりて衣をいかに

歌一しと

後京極實納末

よもいかにし月にもまじりて衣をいかに

百首の中に娘の 歌一しと

入道麻呂の末

娘は多のりりゆいゆい限つて神田のやゝありは

参議雅経

娘のゆり野のあさちうと括てまにわらう言うとが

歌一八

鎌倉有末

后鳴くこしこ胡堂のあまよの秋秋はまじりむけり

西行法師

し里の娘のまもそ男一ろかるりあせつとまうと一の凡

限わ我らうりか文のゆらうとわ子とくうと文をしか

藤原保光

く我を井のつとふのきかおまをいりくらはなは

建保二年娘たてまろうせりけり

ゆ大たつちのあまのいづちのきみた

みるいけ娘の氷のくまうとまのころとく西のやうと

参議雅経

わりののりゆいゆいあまねる錦立田の西のいさうしじ

信正の書

つゝ常のりちるよのおまにあさゆ麻のたつとる

後は世ち入道麻呂の家よりおまをよま

けり

皇太后たかの書

西のやうにせしめしむるをねまの娘の言也しとよみすし
百の言の中よ 式子に祝し

娘のうわれ人かうの思松のしとくもくらにいのおま
用白丸を家百の言よきけつよ

指中納言山家

はるに神よふと思娘のりよこしとて家玉のしとくしと
娘

后三位範宗

なほあうめとてくし文をふくふとよと下世奉のおま
申

申官思子

いこもつちの津枝はるにいよとのおまはあつとめえ
う

う乃のめとて娘すき言にうむにけつよ

指中納言隆親

しく我之種とて女由我種なるのしとくらのし世奉のおま
歌

歌しとく 法中元寛

うめあすますとてわし村西の信わつとくらのしとくあ
建保四年右人末家言合をマ紅糸をくめら

后三位家隆

古卿乃みくこ京にわあ人こちとて娘のまとあ
文治六年女入内屏凡日

后法性寺入道藤原白を致下

すもろより峯の梢よりしりぞきて感^{いづ}久しむ娘の文小

後述久しむ人た

いよも又吹く寸^せつらつら天宮人よみあり志^ちど

左京左史^{さき}歌^{うた}補^{おぎな}奇^き合^あい^いふ^ふけ^けつ^つら^らお^お笑^{わら}を^を後^ごて

つらつらけら 指中納言^{さしちゆうなごん}紀忠

片吹ちなるこのよれもみららつ四^よの雨^{あめ}ふくまうこりう

家^{いへ}の^の百^{ひゃく}首^{くび}う^うよりと^とゆ^ゆけ^けつ^つら^らお^お笑^{わら}の^の奇^き

用白左大臣

立^た田^た河^かを^をむ^むじ^じつ^つの^のよ^よれ^れと^とけ^けれ^れが^がよ^よら^らを^を流^{なが}さ^さう^うめ^め思^{おも}ひ^ひを^を

後京極^{ごけいごく}持^{もち}政^{せい}百^{ひゃく}首^{くび}う^うよりと^とゆ^ゆけ^けつ^つら^ら

小休^{せうきゅう}辰

そそ^そし^しゆ^ゆ娘^{むすめ}乃^のこ^ここ^こを^をけ^けれ^れる^るに^にみ^みを^をわ^わさ^さる^る所^{ところ}の^の白^{しろ}を

娘^{むすめ}の^の言^{ことば}代^{しろ}奇^き 復^{たがひ}子^こに^に親^{おや}と^と家^{いへ}持^{もち}津^つ

新^{あらた}娘^{むすめ}乃^のも^も向^{むか}の^のよ^よれ^れと^とみ^みら^らる^るこ^こみ^みつ^つあ^あや^やち^ちり^りあ^あは^はは^は

指中納言^{さしちゆうなごん}實有

本^{もと}枯^この^のこ^こう^うい^いら^らく^くつ^つら^らお^お笑^{わら}を^をふ^ふく^くの^の娘^{むすめ}に^に流^{なが}る^るじ^じと

春^{はる}儀^ぎ雅^{みや}行^{ゆき}

娘^{むすめ}い^いら^らく^くれ^れる^るわ^わく^く家^{いへ}立^た田^た河^かを^をむ^むじ^じつ^つの^の原^{はら}と^と交^まり^りる^るは

九月^{くがつ}盡^{つひ}日^ひよ^よみ^みは^はな^なら^らず

入道^{にゅうだう}前^{ぜん}左^さ大臣^{だいじん}

あすのちのあつさを何はつとあつたわひと思はぬ故の別ち

八重のさか

ささぬわいに長月名のきりきりかけら

故のさか

新勅撰和詩集巻第六

冬之序

冬之序

人伴池重いんぱん

秋月内なるあつたあつたのちのちりるはのゆき

相摸さつもと

いづれに秋月なるを秋月也といふるは内なるか

在元方ざいげん

いづれに秋月なるを秋月也といふるは内なるか

人納言清蔭直子院卿のさか長月の比あひら

いづれに秋月なるを秋月也といふるは内なるか

しすよけり神青のつら申じり

うし子

ち乃多まいごうけいけい今い西白にけを渡海

歌し子

ち福ね也

あつり神よ也れす神青ぬ糸い西ごちりよも飛

前中納言延房

かき帯じりくあろよみらりけけりこの夜ちりし

持大納言宗家

あそく娘のうもれり錦さうりしにまはりしのは

後兼蓮院即所うのまのこも人お河はゆり

てお糸は水こしんをよを依けりし中將よは

けり時

右進大將通房

水の面よりうら多のちを我お糸を波こみけりか

九条左衛門

人井けりしお糸のうもれりしに依れりしゆりしに

後冷泉所止時殿上のきりしうに甲しを渡

依けり

中納言資信

お糸のちりれとてし血大井河川流のをしと結きけ

白河所止時うのまのこも月前落糸い

んを渡依けり

橋後信朝末

久し乃月すまづるなりしよとくも西にお笑るなり

歌し子

入道二不祝と道助

こし乃お笑吹く庭の面におもつぬ娘の夕止

又百番うたふ

大徳の有家

花をの思ふかゝりまはつれもそく松よこいふる風うらぬ

建保三年の裏うたふとく

正三位家隆

かうこ乃つてすやいにいゆん花のそ弁にいほさきまん枅

わゆのまの
外冬開月

後原信定朝来

すのの浦は娘をうめぬ開ちとあつたよの月いさるん

法性寺入道兼開白の夫をいふける時家哥

合

檀中納言師俊

あひすい花よの枝たうこおれは後とてまのうしろいおん

延喜十二年十月廿八日水の内つてよきく

うへくちあわういふけるにわくまよとて行な

延喜朝来

みまういよひけをうにきまの光浪のゆきうと文面つら

源忠朝来

そくおよふうたふしうかちけむの盛かふらうとん

さしはれくはあしけつ日業式Pよにうら

と東門院小女将

書向多くすつしゆちてとこくしいた思入る河向りし

ゆ

無式部

しりりの河向れえいしるわれなるしる袖うかくよま

山海向るこしつらんをよまゆける

源師賢朝来

袖也くもく我ちけき汁五月に河のしよくち

冬より淡ゆけりま 右衛門督為家

冬よりくく雪の後ゆきよすの又紫のちわ

正二位左京

内るよは我也又紫とるち多よしよつこのあめ

は姓ち入道前用白家言合ま

源兼昌

夕にくひつこのよれちゆりるたえくちけり

麻糸織経感言合一ゆけりま

夏原乙重朝来

よのよよりりの乳いさかき禁の里いけり

平経正朝来

村中乃らうたきよふくしよまはくちま

建保六年に裏言合の冬

前内大夫

井三月内るよをうらふわらふりふ神と交りまき

歌一十

前大儒正慈円

深^{ミコト}く木の妙つとてくろ梢より信くろくは花をわけ言
月を思ふ娘の妙つ^{ミカド}の夕言たよけ吹拂ふは共うの凡

前大納言忠良

娘はまのこく思ふの丈枯し月乃うくはをうにまき

殿富岡院人補

えんじ^ミが我におじら白毛のゆるく寝るまを枯^いのを

正三位家隆

古乃をのりけとそく我て相の落矣日夏ゆりや

よ又百番うかに

夕にぐり^ミのふにけ葉は戸は夏もはゆは月のを

百首うよとけけう冬三

兵部卿實

さゆりよいかりや夏のおくしをみしられよのわきくはえ

建保四年百三十一中し冬三

前内白

きくく滝川流をくまて谷のくやうさむらり

歌一十

式子祝日

吹しよふ滝はあはららけりてはこころのなやみありぬ
落滝は老きあはれりては氷と雪はあはれぬ
用白左大臣家百々言よとけけるよとけけるよとけける

中宮退馬

はつとけけるはつとけけるはつとけけるはつとけける
はつとけけるはつとけけるはつとけけるはつとけける
はつとけけるはつとけけるはつとけけるはつとけける

凡そしてよとけけるはつとけけるはつとけけるはつとけける

寛政元年女中入内屏風湖邊外傳

内大臣

志ろくくやあのはつとけけるはつとけけるはつとけける

史百番言合日 官妓門地丹後

あはれはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは

二条院灌枝

うらとけけるはつとけけるはつとけけるはつとけける

久世百々言よとけけるよとけけるよとけける

皇太后宮人史後成

月きよくはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは

よ島を後成けり 権中納言國信

あはれはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは

源政國朝夫

凡吹いりよしの浦の濱よ鳥わしゆは浪のつらわさうちを

千又百番言合よ 源具親納末

こよめもみりし吹こすは凡は浦より外の友さうちを

鎌倉右人末

凡こじと文の更ゆをいしつ鳩つるよの浦よ鳥鳴り

寛治元年女所入の屏凡山野雪朝

蘇用白

うらこじと松のふも影のまじしむ候人多をみとる雪のふ

つらつら
ゆふた

わらわにそらあつし世のまらるるおのまらるるにまらるる

松中納言せらる

とこ鳩つるよのまじし埋れてありのまにみ雪にみ候

言来り松山人わしとや松原松も言ふくし

正三位家隆

とこ鳩つるよの松よわしとてふも言とるくさかふ

賀茂重政

ゆらまのまじしゆのよと雪らるるゆらまのかにまらるる

高野はゆける比寐は法師大京は後けるまじし

あはは法師

大京にまじしゆのまじしゆをけれ言るる松を思ふくさかふ

くしあす

刑尸花兼

おしほの緑のまよふ思ふにせむ野の雪降るを

清浦初花

雪井より七りくら雪久る六月のかつゝの花もやまじ

百々雪雪

藤用白

いづ人のそしに我もまわらるる雪をいじり月乳

用白丸人未

こむの袖も雪の白あまよりのまよふに思ひま

冬月を映付け

左京右史初補

雪もつらう野のまよふまよふまよふまよふまよふ

冬雪を映付け

後京極持政藤原人未

まよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふ

まよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふ

鎌倉右人未

まよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふ

正三位家隆

つらう雪のりけえゆくのそしに雪の白雪

建保元年の裏手合を海雪

八条院人未

雪乃あまの雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪

正三位家隆

つらきうらまじりく降雪のわきまきつははゆり舟
も陽に家言ふま 康賢と母

あまみけらふのわしおこしおれり人よりわたり白雪
歌しつ

雪はなほ

よぶるみちいひのちかきを雪ふりこけてしるる人

堀川地は白雪をちりけりは

巻後

おくの松の葉のこ降雪へ人のあたるむをそ有る

建保六年の裏言ふ合ふま

入道麻呂政大

川向又ころと路と今やこもり里さるるちりけり白雪

春雅雅純

かよふしすうのちりし者なきころと山の雪は白雪

用白丸大氏家百首三言淡はけり雪言

兵部卿成実

しる雪のころと山の雪はうらまじりけりしるる推葉

古後雪をよこはけり

中宮大史通方

谷ちりみ雪のふる道わたりてにわたりしを知らぬ

家言合は書し雪こしらんを

麻用白

言下すこり殺し雪とてさよあぢみ家此の松の下に
言合は寒衣極火こしらんを

嘉陽門陸越前

板間より袖よとてさよと馬に召まらるる埋火のり

後京極持政家言合に

夏京隆信納来

いふ我がまよとて我思ふなり松と何のせうり

歌一巻也

鎌人毛右人來

あつちのころら何を火のなり我てさよ年言ハ

又すさ言よとてけり耐年の言をわしとて

つらんを

入道二公祝と道助

らちちちなり我て早さ年波のよし田也火とて

正三位家隆

いしちちちの袖のつら我たさるる情じをさよ年の言

如影法師

わすのけりる削きし有物をさき方とてね年言ふ

歌一巻也

大納言師氏

さよの大人人とし我がいしとてさよをわすらるる

書

あつ雪をうらむるに似たり

書つての年の数

新勅撰和歌集巻第七

賀正

貞永元年六月きつこの文はあつて始て
癸亥元年こゝろを誦とてお供けり

前用白

鶴の子乃又つて子のまゆをさかしてむらさきや

用白丸大也

久このわさうにけの夜をいせのこゝろのくまも

寛治八年八月言陽成院宮三月月三

周防内侍

にむすもみこのしげ月影のきううふわきの下ふ
院のんをよめる 後京外家朝た

天の下むささみくれきりいひまこのしのこと又を
百首うりやると依ける時祝事

後にはむ入道前用白を改た
太宰大貳重家

りうさし我わらけのちよとをきくしひまのこ
堀河地行不改ことらんをよるとけりけりた
富家入道前用白を改た

より世所のうさささるるこ方せつるるきりひを
も徳又二年た大長家三合よ

後京長能
あまののしとの松の涼みつらわ水とけいみけ
歌~~~~ん 実心納卜

枝の寸春日の京代娘小松いのらあつらひ秋うとるは
天徳二年有人を又十賀屏凡
清原元補

つゝ富のあせのけりる
勅使より丹官はゆりりくよと依ける

中納言兼輔

異行のよけたまにこの國のよき事いしとのこといひは

一品康子の祝日裳きよけり

乙忠朝臣

みまのいしと思ふ万世のよき事いひのうらみ

天曆はみまにちれりゆきよけり

中納言朝臣

大至りし人の小松をまげりしゆまの事をか

歌一十

よき人一人

うれしき昔は袖にゆきまのよき事いひかたわらむ

長元六年用白に何れに子りよけり

中納言朝臣

小年ゆきまのゆきまのよき事いひかたわらむ

永治二年崇徳院持政のほけり家より

行くと松契の年このよき事をよきとぬけり

大炊出にたを

うらみし人の志のゆきまの娘小松にちよるす積め

後白河院はゆきまのゆきまのよき事をよきとぬけり

月より後ゆきま 中納言長方

神垣やうのねにゆきまのよき事をよきとぬけり

仁安三年抄及周徳家より對松年餘といふ
心と淡休ける 持中納言兼光

うしりーふら松の緑も秀いよ世もくふいようみ世の始いよりけし
建仁三年正月松有春多いよつらんをよめた
いづりうらけり 麻吉人

常盤なる玉松いよも秀く我が世のまいよみういよわは
清いよらういよにいよふいよじいよついよしいよ思いよるいよものいよはいよけいよる

持大信都良英

るく思いよひいよわいよるいよていよ祈いよらいよついよたいよのいよ世いよのいよ年いよかいよらいよるいよ
老いよのいよ後いよ考いよのいよりいよめいよよいよといよ休いよけいよる

入道麻吉致太

春いよはいよまいよりいよのいよ松いよよいよあいよらいよといよもいよあいよらいよ我いよをいよ人いよかいよりいよにいよ
天徳四年同いよ之いよ月いよ中いよ夜いよはいよ院いよ新いよ成いよ梅いよ花いよ寺いよ
堀河いよ有いよ太いよ人いよ

くいよみいよらいよ玉いよのいよくいよらいよはいよ梅いよ花いよのいよけいよこいよ考いよらいよあいよらいよ白いよと
持大納言信家

常いよよいよりいよといよ考いよらいよのいよけいよこいよ考いよらいよ世いよもいよあいよらいよのいよ世いよをいよらいよ
寛永元年十一月女片入いよのいよ屏いよ凡いよ京いよ真いよ人いよ家いよ
元日いよういよらいよ所いよ 麻吉人

初いよ考いよのいよ花いよのいよまいよこいよはいよ松いよをいよ入いよていよ民いよたいよんいよをいよらいよちいよらいよういよらいよ

江戸人家柳あらし所

入居おをぬ人夫

名のふかりとくつみまの玉柳入江の浪はみかしく見
池邊夏花 正三信志家

もろ日え^{アサ}夏の^{アサ}の^{アサ}こを^{アサ}あ^{アサ}て^{アサ}ま^{アサ}に^{アサ}ほ^{アサ}ら^{アサ}る^{アサ}者の^{アサ}花
四月^{アサ}の^{アサ}田^{アサ}早^{アサ}苗^{アサ} 内人良

み^{アサ}や^{アサ}ま^{アサ}り^{アサ}ぐ^{アサ}く^{アサ}こ^{アサ}ま^{アサ}に^{アサ}ほ^{アサ}ら^{アサ}る^{アサ}者の^{アサ}花^{アサ}つ^{アサ}の^{アサ}花^{アサ}は^{アサ}ら^{アサ}し^{アサ}く
八月^{アサ}の^{アサ}野^{アサ}ま^{アサ}ち^{アサ}く^{アサ}こ^{アサ}ま^{アサ}に^{アサ}ほ^{アサ}ら^{アサ}る^{アサ}所

麻用白

今^{アサ}う^{アサ}は^{アサ}り^{アサ}く^{アサ}こ^{アサ}ま^{アサ}に^{アサ}ほ^{アサ}ら^{アサ}る^{アサ}者の^{アサ}花^{アサ}つ^{アサ}の^{アサ}花^{アサ}は^{アサ}ら^{アサ}し^{アサ}く

人家規月

つ^{アサ}の^{アサ}宿^{アサ}の^{アサ}光^{アサ}を^{アサ}み^{アサ}く^{アサ}こ^{アサ}ま^{アサ}に^{アサ}ほ^{アサ}ら^{アサ}る^{アサ}者の^{アサ}花^{アサ}つ^{アサ}の^{アサ}花^{アサ}は^{アサ}ら^{アサ}し^{アサ}く
田家西^{アサ}の^{アサ}規^{アサ}月^{アサ}

年^{アサ}の^{アサ}暮^{アサ}は^{アサ}規^{アサ}月^{アサ}の^{アサ}光^{アサ}を^{アサ}み^{アサ}く^{アサ}こ^{アサ}ま^{アサ}に^{アサ}ほ^{アサ}ら^{アサ}る^{アサ}者の^{アサ}花^{アサ}つ^{アサ}の^{アサ}花^{アサ}は^{アサ}ら^{アサ}し^{アサ}く
入道^{アサ}麻^{アサ}を^{アサ}ぬ^{アサ}人^{アサ}夫^{アサ}

規^{アサ}月^{アサ}の^{アサ}光^{アサ}を^{アサ}み^{アサ}く^{アサ}こ^{アサ}ま^{アサ}に^{アサ}ほ^{アサ}ら^{アサ}る^{アサ}者の^{アサ}花^{アサ}つ^{アサ}の^{アサ}花^{アサ}は^{アサ}ら^{アサ}し^{アサ}く
同^{アサ}社^{アサ}規^{アサ}月^{アサ}の^{アサ}光^{アサ}を^{アサ}み^{アサ}く^{アサ}こ^{アサ}ま^{アサ}に^{アサ}ほ^{アサ}ら^{アサ}る^{アサ}者の^{アサ}花^{アサ}つ^{アサ}の^{アサ}花^{アサ}は^{アサ}ら^{アサ}し^{アサ}く
め^{アサ}け^{アサ}こ^{アサ}ま^{アサ}に^{アサ}ほ^{アサ}ら^{アサ}る^{アサ}者の^{アサ}花^{アサ}つ^{アサ}の^{アサ}花^{アサ}は^{アサ}ら^{アサ}し^{アサ}く

小野官有人夫

万^{アサ}代^{アサ}規^{アサ}月^{アサ}の^{アサ}光^{アサ}を^{アサ}み^{アサ}く^{アサ}こ^{アサ}ま^{アサ}に^{アサ}ほ^{アサ}ら^{アサ}る^{アサ}者の^{アサ}花^{アサ}つ^{アサ}の^{アサ}花^{アサ}は^{アサ}ら^{アサ}し^{アサ}く

九月九日辰一位倫子事のらこそおしあいの
こいすくよしおけだ

Shikibu
世式部

事のあつるりつりし神多れてものあつし母にゆりし
菊をよきおけら 元補

つゝ宿の事れ白屋よりし世の奴れありし^{いさ}く^{いさ}はみえ

康賢と母

七月にりいりめりし菊多れおし^{いさ}く^{いさ}はみえ

後冷泉院はみ菊映水こし^{いさ}く^{いさ}はみえ

りう^{いさ}く^{いさ}はみえ 持人納言長家

秋五月のころみく^{いさ}く^{いさ}はみえ

辰保三年大井河より書しの日談^{いさ}はみえ

大宮大女

大井河よりし^{いさ}く^{いさ}はみえ

前中納言侍房

大井河よりし^{いさ}く^{いさ}はみえ

寛政元年女入り屏凡十一月江邊寒く芦鶴

入道前々人未

ちよふつ^{いさ}く^{いさ}はみえ

江繪屏凡石清水原村女

権中納言定家

ちりたり衣ますれうう竹の天官人のういこくを

頼保元年大嘗會に奉言丹波國ううのよ

権中納言定房

久うう月のかじりのよんよんあひはげのホ

寛治元年悠紀言を江國みじらた

河内やみじらのよたおまひやうかりを錦をうし

仁安三年悠紀凡俗言

定内記

あまにらそとて子鏡のよるれえうううううう

貞應元年悠紀言あり野

正二位家衡

文への草葉のなをうううて玉野の京は月うみけ

一之基の凡俗言

権中納言頼賢

ゆふうと玉ねのよ世國といのうううううう

御屏凡言

是等のううううの日記草ううううのうううう

歌

讀人

月とわにかかりゆきとて言うううううううう

延喜六年日本紀竟宴三ツ峯田天皇

西三奈右大臣

年へくちりゆりてきつひの十んねいさけりて遠く安ゆり
豊山食炊屋姫天皇

貞信云

つみをいよいよのまよひにさうめし世にまゝ我に水にまじり
天平十八年正月雪布り積り依ける初みり
ちと遠部をさわかたよ天皇の申言西三
奈右大臣と依ける前より
みさねいけりてさうめし依ける

井上太夫

降雪ありて同くは天皇にのまひ我がふりて
右大臣の佐保の家よりゆきとて遠く依ける日

聖女天皇御製

きりりやりの都れくらま
にけりて高き我にあり

新勅撰和歌集卷第八

羈旅歌

大宰府より信ける所府方よりひさかた香推浦より
あういひけるよもあう 人納言旅人

いづかこころわのこころ白妙の神も思ひくわさなれど
越中よに信ける所國のいづこ布張のこころみ
わういひける所よあう

中納言家持

ちよの海のかき白波あつこころいづかのこころみ
あすのこころのちよあつこころみあういひける所
あういひける所よあう

信ける

頼田

旗の野にわたりあつこころいづかのこころみ
あういひける所よあう

持統天皇御製

あういひける所よあう

慶雲三年難波の文よりあういひける所

田原天皇御製

あういひける所の羽いよあういひける所のこころみ

信ける

信人

いづかこころわのこころ白妙の神も思ひくわさなれど

くもくは流けつ雨のみこの世このくもくは家とあつた

弁基法師

まじらふたかく行ていふまは扇田のくもくは独りも存し
真子院宮儀を流しよありゆけつあつたよ
にまゆにうまむくくく野こいふ所を流し

人納言昇

くもくはのぬくもくはくもくはあはくもくはくもくはくもくは
うつふくもくはくもくはくもくは

謙徳云

けいんまうくもくはくもくはくもくはくもくはくもくはくもくは

かきくもくはくもくはくもくはくもくはくもくはくもくは

慈光法師

都よりくもくはくもくはくもくはくもくはくもくはくもくは

後原惟親の越後くもくはくもくはくもくはくもくはくもくは

伊坂大輔

くもくはくもくはくもくはくもくはくもくはくもくはくもくは

私泉式部

くもくはくもくはくもくはくもくはくもくはくもくはくもくは

あつたのくもくはくもくはくもくはくもくは

藤原清正

りうろく乃乃の我と思へぬけく何のまじし種入しし悔に

宇佐使餞日 左京大夫源頼朝

まづの我もるたにいまのまじし種入しし悔に

源頼朝 道周法師

まじし種入しし悔に

源頼朝 藤原中興

入道藤原公成

旅しつとに悔の鳥のまじし種入しし悔に

別の心を懐ゆる 源家長朝

別の心を懐ゆる

藤原親能

別の心を懐ゆる

上佐の國は年へ休ける所ありし懐ゆる

藤原親能

懐ゆる心は地也しとて我の都をさしわすし

指大納言忠信言合し休けるは旅の志をよめる

藤原信實朝

く我よけしと思つたの懐をけし我の懐のこころ

旅の心を懐ゆる

藤原中納言直房

まことおね旅の道あそびにけりつゝ志代京人より
宇治用白有馬の湯入るゆりける名もえ旅の
言をゆい言淡休けり

指入納言長家

飛るいのちのわらうと宿り飛く飛り旅とこうこゆり
弁官群れけすりのねましく旅言淡休け
る

指中納言通俊

いづこもくさくゆい旅のすまわりのり為よおまあ
用路曉雪こいづらんを淡休けり

指入納言実

鳥乃およわを遊しきけり旅衣こゆりもくさく用白
久世百三言けり旅の奇

皇太后大夫俊成

我思ふ人よみとさしつこも角田河原北々く飛もえ
らるるあわのめさうさひもさるはいささ都人
後法性寺入道藤原白家百三言淡休けり
のんをよみけりけり

後法性寺上人

草枕しすの愛海いさよこまじれは旅の電うり
百首言けりけり
後京極持政藤原大夫

うら枕元のうら(と)白波のうらあふし(と)ささよふ(と)み

式子日記

あゝ後のま(と)の(と)よかつ(と)つれ(と)つれ(と)つれ(と)つれ(と)つれ

源師光

照月乃みら(と)り(と)と(と)ふ(と)う(と)う(と)う(と)う(と)う(と)う

歌一巻了

鎌倉右大臣

世中の言(と)ふ(と)か(と)り(と)る(と)諸(と)く(と)わ(と)の(と)小舟(と)の(と)い(と)る(と)る(と)る(と)

入道二品祝(と)家(と)又(と)す(と)る(と)う(と)後(と)休(と)け(と)る(と)海(と)嶽(と)

は(と)ら(と)幸(と)清(と)

昔(と)思(と)つ(と)て(と)向(と)り(と)は(と)る(と)夕(と)波(と)よ(と)う(と)う(と)う(と)う(と)あ(と)の(と)浪(と)

藤泊の(と)ん(と)後(と)休(と)け(と)る(と) 授中納言(と)相(と)賀(と)

よ(と)を(と)う(と)う(と)う(と)う(と)う(と)の(と)教(と)り(と)し(と)れ(と)は(と)波(と)の(と)ま(と)つ(と)れ(と)の(と)い(と)は(と)

正(と)位(と)家(と)

浪(と)枕(と)あ(と)に(と)う(と)く(と)す(と)い(と)は(と)る(と)何(と)を(と)る(と)み(と)の(と)浦(と)さ(と)ら(と)し(と)

椽(と)の(と)ん(と)を(と)後(と)休(と)け(と)る(と) 春(と)儀(と)雅(と)行(と)

ま(と)ゆ(と)り(と)又(と)も(と)ら(と)ん(と)幸(と)れ(と)し(と)ら(と)う(と)思(と)ふ(と)の(と)光(と)

真(と)昭(と)法(と)師(と)

月の(と)ま(と)つ(と)し(と)虫(と)よ(と)ら(と)る(と)椽(と)衣(と)す(と)の(と)露(と)花(と)の(と)夕(と)露(と)

都(と)を(と)り(と)あ(と)れ(と)て(と)所(と)り(と)く(と)は(と)向(と)う(と)く(と)め(と)く(と)つ(と)休(と)け(と)る(と)

よ(と)み(と)休(と)け(と)る(と)

八(と)条(と)院(と)の(と)念(と)

世をうごかす我一人の別をうごかすのよき事なりは
白布の八きりにしをうごかすのよき事なりは
建暦二年の裏衣言ふる籍中脱くといふ人
と後休ける
六条入道前左大臣
うごかすといふは世をうごかすといふ白く
建保二年の裏衣言ふる言

前田大夫

く我一人の別をうごかすのよき事なりは
世をうごかす我一人の別をうごかすのよき事なりは
うごかすといふは世をうごかすといふ白く

蓮生法師

古より我一人の別をうごかすのよき事なりは
様の人を後休ける
前大臣正慈
うごかすといふは世をうごかすといふ白く
後奥の煙をうごかすといふ人を送る
まわて後休ける
復子の親と家持
東路の野路の草の香をうごかすといふ人
惟高乃みこのりけりといふ人
休けるをうごかすといふ人

業平朝夫

枕しく草引じすくしむし娘のようこよれん

難波よみゆこ依ける所よん

置始東人

大付のありし宿の松子を枕に思れ

家一井もりぬ

新勅撰和歌集卷第九

神祇奇

延喜六年日本紀竟宴下照娘

中納言當時

~~~~衣志つてる娘のけりしうわえは同ゆのり

天慶六年同竟宴下照娘

中納言維時

わめの志つてる娘のけりしうわえは同ゆのり

月夜見尊

源三忠朝

月よみのわめのけりしうわえは同ゆのり

天見屋根尊

橋仲遠

わらわく照りのまのりあすしはなはなめかまのこころに  
神樂のこころあめり

うらまをい袖こころにわがまねのこころあしこころわ  
ちこころいあめりあめりあめりあめりあめりあめり

堀河地は言いてとあめりあめりあめりあめりあめり  
こころあめりあめりあめりあめりあめりあめり

あけのよりのあめりあめりあめりあめりあめりあめり  
あめりあめりあめりあめりあめりあめりあめり

二条太皇太后上人尊

あめりあめりあめりあめりあめりあめりあめりあめり

唐申れよみあめりあめりあめりあめりあめりあめり

けりあめりあめりあめりあめりあめりあめりあめり  
禮子の親と家宣言

あめりあめりあめりあめりあめりあめりあめりあめり

同三月あめりあめりあめりあめりあめりあめりあめり

女房の中あめりあめりあめりあめりあめりあめり

京極お用白を致人た

あめりあめりあめりあめりあめりあめりあめりあめり

賀茂原河女あめりあめりあめりあめりあめりあめり

は成る入道お持政を致人た

いふれいこの花の考なりしをこの文は我のそくし  
思ふを讀ゆる 貫之

しわあよりすれり衣のわりのひとのありし我のそくし  
道周よりすめゆける廣田社より今日社に雪を  
休ける 三系入道左大夫

しわあよりすれり衣は後雪よりす梅枝よりす  
原内系系還立の片社をよき休ける

吾々の成実

まゝの雪の月よりけりしを火よりけりしわあよりす  
秋葉を讀ゆる 大納言通具

有明のやゆりあるをそくは月氣のゆりありしを

建保三年百首よりけりしを

正二位家隆

棟よりをそくは月よりけりしを  
百首よりよき休ける

後京極橋殿前を改め

鈴麻河よりすをいふはそくは月よりけりしを  
春日よりすの下道よりすをいふはそくは月よりけりしを

建保六年の百首よりけりしを

僧正行意

春日かほつとね 娘身の人しう 麻のたぐはゆら  
日吉社岳跡の心をよき休ける

前大信正慈田

志賀の浦よしののまは浪きつわらつとあしける古の  
切日こころあこのまぢえこころ陰てつひわらりあ  
うをきりこころあるあしとゆいすまのつと月の入るぢえ  
述懐のまよき休ける

つごのいれも袖をきりすこらまぐおじか人の泪  
社頭まぐ八十賀につつとつとけつと後ゆら

祝部成仲

かふれつとらの考は成をせつと志みのつとあるをほ

よ又百番あ言い ち所門は人を

あをよりにれのちつとあしとみは佛のあつとあ

美を後休ける 春儀雅経

つとけつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあ

社頭まきりける述懐

祝部忠成

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあ

歌 妹は法師

紅あつとのあまのま垣く娘のあつとあつとあつとあ

祝の心を淡ゆき 賀茂重政

秋のうつしとねと志をわしむるに秋の心多うはま  
遠懐を淡ゆき

道木田成成

八重林しけと秋の教うらむるの心よををれ  
駿河國は秋物しけけるよるに秋の心は  
平春時

よも振秋世の月のこも秋の心はむらむらと  
寛永三年伊勢勅使ゆへに秋の心はむらむら

雨晴こくはけるよ宣言の心はむらむら  
秋の心はむらむら

秋の心はむらむら

卜部兼直

又にはわきの八重を吹らむ早あはしけるよの心

秋の心はむらむら

秋の心はむらむら

里秋の心はむらむら

秋の心はむらむら

秋の心はむらむら

能周法師

秋の心はむらむら

秋の心はむらむら



新勅撰和歌集卷第十

釋教寺

古佐國室戸こいふ所

弘法大師

はげの室うらひに我す免らぬの波風よとせりそちこそ  
しらすの春をよこはけ

空也上人

有海の方草葉よりる春をよこはけ  
伊勢のしのもちしよとせりそちこそ

人信正行基

法の月久しくして思ふにさう入更をまつとえくりに  
云く子 千觀法師

法の方月わつる方心也として一切の事のこと思ふを  
尼の戒るをゆるる 大信正親

おんはよきそののうらうをに我いつのころとわに  
大信正親の階も信長の導師より草又  
女佛のうら流けつを因て胡よりけり

大信正親

草又甲く佛のころに因に我のころと  
大信正親

流もる佛のころをさうとさうとさうとさうとさうと

錫杖のんを流けり

いこのとをさうとさうと佛のころとさうとさうと

は成も入道前持の家は花経廿八のころ

を流ける上序の 持大納言の成

昔も花のりらくあふらうのころとさうと

又百弟子の 是成も入道前持の家

ききにくる人かりを衣てさうとさうとさうと

女お言流けり

女信都源信

油乃この世をうつし思ひりしを乞ふようい世にうつし  
依釋迦遺教念佛陀こいふ人をよむゆける

京極お用白家肥後

かゝるをうつし入あ月のなかりとあよんをいつくつをゆ

抱婆品の心を後ゆける

贍西上人

けのなるもふくころしよまきやそは世をうつしを

親音成又お封よりとをゆける時のちやう

吟白家太身今后ま

くふにけ民の娘のころころ頃てつるも世をこいな

後心和奇集の言般若心行

蓮子の祝

世をうつしこれくるはいかに我こ我りゆくのゆける

普賢十願請佛経世

みる人の心ゆをわくこれくもまよ思とましく我ま

藥王思愚是女身

まれくるは法を因にき道一わ我い事を後思ゆらふ

百三三うち中は大悲代受苦の心を

式子内親

くらつきい人の思ひは力をうつしにのPrimo

徳賢門地中納言人々すめくは花経サハ  
の奇よふりと依けりし譬言喻不其中衆は悉  
是吾子の心をよ光る

皇太后官大夫後成

みるまごころにわけるる世中よりみるはのまける物を

随喜功德品

谷河のふり我のまをくじ人も因いりいさるるをける  
養福門地極樂六時讚を修りうとく我は  
くつこ三つにうゆにうけりる虚空をま  
すくそ歡喜國をうくゆ也

ゆ折にう花のあこもゆこい思よそのいこをさしふ也

白銀抄りりこりわくく普賢大士来至す

白妙日月の雪りしみにけりうをうけるえらわをう

舍利報恩誨こり心をけりひ依ける

前大徳正慈田

くわのほに執事此きぬ日わりのりて後のえらわを  
悟り雪りうのひは時をうとまは思をわさるくの月  
金剛界の又部を後依ける佛  
今うへよえしあらしむら月こころふ我に到いふめえ

摩點本の心をよまける

わらちりぬにわらへきくぬの奥よわわ一月をみふれ

家は百々三のよりとふけるぬ又智の大同鏡智

のしを 後は性も入る亦用白を致す

墨くくみくわくふくくくくくくくくくくくくくくく

河合經 友原隆信朝長

わつこくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

妻樂行不 藤原盛方朝下

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

法花經抱婆不のしを

は下きくく

はのこちかば上りくくくくくくくくくくくくくく

是式アゆえくくく結縁経法書一ふける所

薬草喻不を道ゆく

権大納言宗家

はのち我くくくくくくくくくくくくくくくく

女ハ不ウ談ゆけるは喜景と

八条院高又亮

力を拾へぬぬくくくくくくくくくくくくくくく

陀羅尼不

天にえそのくくくくくくくくくくくくくくくく

勸發不受持佛語化他而去

寂然法師

ちりくは佛の言ねをちりくはみほのむを家いとして  
産塔に子の心をよきよける

殷富門院人補

かひすじの衣をきく所のていふくはちりくは  
百三言淡ゆるよ十界言人衆

後京極掾前左大臣

夏のせし月日くく切言て又いふくよ力をいよき

善産

娘は月よりハ司しよあつてえんかいく教ふ孫らくゆき

十二光佛の心を淡ゆる又不断光佛

源季廣

月乳入山のていりくわくく思をみるありてふ

如来に追誓願仕の心をよける

轉也法師

くもくわちれ蓮はす心月をんの水よりいりてうら

中道觀の心を淡ゆる

信守法師

句心は心のをくく清くしむるくは月の

悲鳴唵咽痛懃本群こつらんをよめり

寐如法師

慈もろ我小敷の京下鳴麻の道名を仰しぬややきりた  
自惟孤露のんを 寐如法師

こころよふのしつをるをねをう鳴麻杖の文を慈に  
十戒三讀法けりよふ不殺生戒

法眼宗因

くまよりかきりしにさきつきくふのみれは慈持す  
不偷盜戒

あつらう印かうの名をしりぬ龍田のふらよの白波

不慳貪戒

岩乃下に朽きねをうりるけ我の面道ら我情じおひ  
經教如鏡のんをよめり

蓮如法師

後の世をこゝに鏡のしけをみくもね蘇わあふは  
十如是のんを讀法ける本末究竟等

寐如法師

とこう系もつちをこつら一もよもしと末もかゝる  
後法性も入道前用白舍利護のいかに  
日十如是のようりと法けるよ如是辨のんを

後京極持政前々後大末

孝乃この始に消し月影の乃とはすこと世成照りか

如是性

二条院灌枝

すりして思ひた念也力のうらに志くしてあら有月の月

人捕人くよすさうすめく天とちよ西うんん

日談休けり

殷富門院新中納言

らめけらくみをきくしりしりしり昔並くはのわら

天王寺の西門しりよき休けり

郁芳門院女房

こりかなく入りをかへし思ふは是こうあのかくやん

ゆびのうら天とちよこりわわ休けり両ね書

けく休けり

後白河院京極

あのみりりやをくしりしりしり天の都に遠さくわあ

るさ人のよよめくしりしりしり人よ光明真言

そくしりしりしりしり

高辨上人

くしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

何しりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

はしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

夏の世にりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり



住居の西の首にいでる松の  
縄床樹を名にいでる松の  
こすのわりの正月雪ふる日すこし  
左禪すうし松のわりの松を  
此神のわりの松のふつにわりの松を  
松のうへをこしにいでる松の  
いでる松を

雪の白玉

松の〜こすのわりの松の

新勅撰和歌集卷第十一

戀哥一

歌一

よみ人

あまのくにいでる松の  
古きよりの松の  
この松のわりの松の  
るんこの松のわりの松の  
なまの松のわりの松の  
朝ふくの松のわりの松の

まよひにけりける

業平朝夫

とていふまじき心におぼしめされし人にしてしにまけく比れ  
まよひにけりける

権中納言敦忠

書物もくもわらみゆる鶴の橋をさるるまよひに  
ぬ

讀人不知

夏を我いみゆりたるかたき世の人共おぼしめ  
下鷹よけり時本陣の依戻につりける

忠義

まよひにけりけるまよひにけりける  
我思ひにほしきまよひにけりける

中将よけりける時向まよひにけりける

中納言朝忠

いふの思ふ人を知らぬにわたりけるまよひにけりける  
ぬ

本院御辰

まよひにけりけるまよひにけりける  
和泉式部よにけりける

太宰師敦通親王

おぼしめし有るものを中へまよひにけりけるまよひにけりける  
ぬ

和泉式部

まよひにけりけるまよひにけりける  
我なるまよひにけりける

人の心もさしおひりてはけをたのむまじ  
けしきりてはあつたけり切うつりけり

後原も光

鳥つとつとわつとさしおひりてはけをたのむまじ

歌一十

道信切下

いじよに我世中もさしおひりてはけをたのむまじ

相授

いじよに我世中もさしおひりてはけをたのむまじ

又節の此舞娘のうづりてはけをたのむまじ

藤原義孝

人よわんをいじよにさしおひりてはけをたのむまじ

又節所よはけりさしおひりてはけをたのむまじ

切よむけりさしおひりてはけをたのむまじ

太宰大貳も光

いじよに我世中もさしおひりてはけをたのむまじ

歌一十

躬恒

いじよに我世中もさしおひりてはけをたのむまじ

女よにけりけり

業平切下

いじよに我世中もさしおひりてはけをたのむまじ

歌一

よみ人

思ふよりおるるをいかに我のいふに汝ららひて能  
くしり守 いかに いかに

湊入のまじり江に漕舟のそとにさしぬ毛をちり我に  
みりしつるおのいさうの湊ちよきうれ用とつりしるふ

よみ入ししと

いふに信すみの江の浦もほす細のり屋と云くすり  
無りしつるもの袖はみらしてみりしに思はうま

堀河城敷書の言を人々よみしと女房の許  
よじりて思ふをわける時よき休けり

持入納言云實

年を我にいりて朽ちる埋まの思ふうらむるや也  
ゆ

康賢王母

るり我のみをとの河の埋まらばこの思らば年を我

無すも後休けり 無すも 後休けり 無すも 後休けり

思のいけりしを藤の春も入らむらう思ふ袖も

久世百々言をけり 久世百々 言をけり 久世百々 言をけり

徳賢門院堀河

くさしにいしおはるる我言にいりしを初め  
袖もくさしおはるるいそりかむらう思ふをみら

皇々后文と史後成

ちんちん我いらとの杜れ又枯よじりてさう思ふ言のん  
ちのうし河袖のこつてはつてつてつて方とるさ物と枯思へ

清補胡也

そよじりてゆわいののちをちかうかみへんぬいぬえん  
つてをよじりてさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
二冬池止海魚のさうりしりて

持大納言宗家

くがはにけいじこ思ふよき思ふのち袖よわさうに潤るあを  
百さう後休けりて思ふ思のんを

麻大納言賢賢

思ひやらうこそかけ我をさう我にけいじんかたわさる泪を

家に百肯言後休けりて

後法雅古入道麻用白冬夜下

紅のさうこそ袖よきさうさうさうさう思ひれ又よ出曲る

皇太后院子書

思ひやらうにさうし思くさうさうさうさうさうと袖は思ひ

宣敷門院丹後

袖乃うのさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

意言後休けりて 皇太后院又又後成

所志ちりや月のいさをさうりさうさうさうさうさうさう

刑部ヲ頼捕ヲ合シ依ケテモ後うしろニシテリルガ  
忠志

いふくちるふくこころのし思ひのし其真のかし  
歌一子 西行法師

あつたはつごのの思しやもひんかごの用をさう  
ふと信家隆

人我寸草の浦にや塩のつらむらゆさくを  
百々ももももうちりけり忠志

官坂門地丹後

いふふんく司にいふふく我てふつと後とひのたて

源師光

わつんいふるまよいて也しゆこみ也人を思ひあつ  
松中納言定家

松子を破やぶ追の娘乃りいふく我思つてうてのうハ  
堀河地百々ももももうちりけり忠志

藤中納言良房

考く我雪の下草ちよものもゆるをさう人のは  
藤原仲實朝夫

逢しつらつちよもの所のよも忠志いさるし  
基後

後よりわりの補は傳舟のふまわすもなすてなす

久世百首をうけつりけるもなす

清補納本

年を我とるもなすつゝなすのふは海を

歌一十

大納言通具

人我す思はうめにしなすそつ林のな葉のなりや

寂蓮法師

おれよふもわすみじろよふなすにしし言のなす

斎藤雅行

まなすちののわすれのなすしをくもなす

右末門普考家

奥乃乃氣の家はなすく人そなすぬきあふ我こ

うのなすのこもなす見なすさくをにしし

にうけつり

御歌

と方とをなすいにし月のなすしをく人なす

なす淡休けり

大納言實家

なすうしなすなすのなすはなす人のなすなす

正三任経家

なすなすなすなすなすなすなすなすなす

入道二おれの家よなすなす淡休けり

一志

入道前太政大臣

多のひ乃でまやふかひのゆわの身になく思ひ申はせ  
百々言後うしろけりも思ひ志

前用白

つゝ志のましてせよとゆひまひ申の始にまじりて  
用白左大臣

つゝ志いるまじりて神よきまじりて枕のふたまじりて  
志いて  
八重虎太左

らつゝ志乃枕といふはあしきまじりて思ひ申はせしるは  
よ文百番言合よ 二重虎ひら潜ひら女

睡をく神をい何よ思ひ志のいし思ひ申はせしるは

志の後休けり 殿富門左大臣

うら思ひおひらうら洞の白玉のまじりて思ひ申はせしるは  
持人納言家良

思ひ申はせしるは思ひ申はせしるは思ひ申はせしるは  
前用白家言合よ 宗系志

正三位家隆

後うらめになく思ひ申はせしるは思ひ申はせしるは  
家言合よ 後京極持政おと左大臣

よのうらめになく思ひ申はせしるは思ひ申はせしるは  
のうらめになく思ひ申はせしるは思ひ申はせしるは



志乃<sup>しのぶ</sup>あまのよき体けりよ

夏原新氏切也

に我らも乃もやいわりとこり野河にりしをわらふ

麻衣<sup>あひ</sup>儀<sup>ぎ</sup>絶感<sup>つたかん</sup>言<sup>こと</sup>合<sup>あ</sup>い体<sup>てい</sup>けりよ

藤原<sup>ふじわら</sup>を言<sup>こと</sup>切<sup>き</sup>也

角田<sup>かくた</sup>河<sup>か</sup>をこつとよしす<sup>す</sup>水<sup>みづ</sup>の流<sup>なが</sup>れ<sup>れ</sup>衣<sup>え</sup>る<sup>る</sup>に思<sup>おも</sup>福<sup>ふく</sup>久<sup>く</sup>し

丸京<sup>まるきやう</sup>ち<sup>ち</sup>吏<sup>し</sup>政<sup>せい</sup>補<sup>ほ</sup>家<sup>か</sup>言<sup>こと</sup>合<sup>あ</sup>いよ

は性<sup>じやう</sup>も入<sup>い</sup>道<sup>だう</sup>麻<sup>あ</sup>用<sup>よう</sup>白<sup>はく</sup>家<sup>か</sup>冬<sup>ふゆ</sup>河<sup>か</sup>

へ我<sup>われ</sup>寸<sup>すん</sup>は<sup>は</sup>の<sup>の</sup>を<sup>を</sup>衣<sup>え</sup>河<sup>か</sup>袖<sup>そで</sup>の<sup>の</sup>志<sup>し</sup>と<sup>と</sup>わ<sup>わ</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>言<sup>こと</sup>合<sup>あ</sup>いよ

平<sup>へい</sup>經<sup>けい</sup>正<sup>せい</sup>切<sup>き</sup>也<sup>也</sup>言<sup>こと</sup>合<sup>あ</sup>い体<sup>てい</sup>けりよ<sup>よ</sup>志<sup>し</sup>乃<sup>の</sup>

源有房切也

る<sup>る</sup>何<sup>なに</sup>袖<sup>そで</sup>の<sup>の</sup>志<sup>し</sup>と<sup>と</sup>わ<sup>わ</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>言<sup>こと</sup>合<sup>あ</sup>いよ

通<sup>とう</sup>因<sup>いん</sup>法<sup>はふ</sup>師<sup>し</sup>

に<sup>に</sup>我<sup>われ</sup>ら<sup>ら</sup>も<sup>も</sup>乃<sup>の</sup>も<sup>も</sup>や<sup>や</sup>い<sup>い</sup>わ<sup>わ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>こ<sup>こ</sup>り<sup>り</sup>野<sup>の</sup>河<sup>か</sup>に<sup>に</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>ふ

志<sup>し</sup>乃<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>よ<sup>よ</sup>き<sup>き</sup>体<sup>てい</sup>け<sup>け</sup>り<sup>り</sup>よ

こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>我<sup>われ</sup>ら<sup>ら</sup>も<sup>も</sup>乃<sup>の</sup>も<sup>も</sup>や<sup>や</sup>い<sup>い</sup>わ<sup>わ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>こ<sup>こ</sup>り<sup>り</sup>野<sup>の</sup>河<sup>か</sup>に<sup>に</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>ふ

百<sup>ひやく</sup>三<sup>さん</sup>十<sup>じゅう</sup>三<sup>さん</sup>年<sup>ねん</sup>に<sup>に</sup>乃<sup>の</sup>も<sup>も</sup>や<sup>や</sup>い<sup>い</sup>わ<sup>わ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>こ<sup>こ</sup>り<sup>り</sup>野<sup>の</sup>河<sup>か</sup>に<sup>に</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>ふ

水<sup>みづ</sup>影<sup>かげ</sup>法師<sup>はふし</sup>

に<sup>に</sup>我<sup>われ</sup>ら<sup>ら</sup>も<sup>も</sup>乃<sup>の</sup>も<sup>も</sup>や<sup>や</sup>い<sup>い</sup>わ<sup>わ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>こ<sup>こ</sup>り<sup>り</sup>野<sup>の</sup>河<sup>か</sup>に<sup>に</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>ふ

建<sup>けん</sup>保<sup>ほ</sup>六<sup>ろく</sup>年<sup>ねん</sup>に<sup>に</sup>乃<sup>の</sup>も<sup>も</sup>や<sup>や</sup>い<sup>い</sup>わ<sup>わ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>こ<sup>こ</sup>り<sup>り</sup>野<sup>の</sup>河<sup>か</sup>に<sup>に</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>ふ

控大納言忠信

西へ行くに舟を乗るのには何れにせよいづれもこのうらみをかき  
歌し給ふ

ふつれよの名をさし思ふ川をさしきくおちのうらみ  
正三位家隆

思何方なるなる水のわらへ清くともわらへ浪のうらみ

志の心を淡ゆき 控中納言長吉

おらへにさるるあけのけいりり我をさるるいづれも

白鳥右大臣文成

よき思枝日



歌一十

本庄体後

なごに<sup>なご</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>

<sup>そと</sup>道<sup>みち</sup>信<sup>のぶ</sup>初<sup>はつ</sup>末<sup>まへ</sup>

年<sup>とし</sup>ま<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>く<sup>く</sup>め<sup>め</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>す<sup>す</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>

よ<sup>よ</sup>み<sup>み</sup>人<sup>ひと</sup>一<sup>ひと</sup>十<sup>じゅう</sup>

こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>  
い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>く<sup>く</sup>め<sup>め</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>す<sup>す</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>  
ま<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>く<sup>く</sup>め<sup>め</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>す<sup>す</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>  
ま<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>く<sup>く</sup>め<sup>め</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>す<sup>す</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>

あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>  
あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>  
あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>

<sup>ひろ</sup>廣<sup>ひろ</sup>け<sup>け</sup>女<sup>に</sup>也<sup>なり</sup>

あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>

九<sup>く</sup>条<sup>じょう</sup>右<sup>みぎ</sup>大<sup>だい</sup>丈<sup>ぢょう</sup>

あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>

あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>

持<sup>も</sup>申<sup>まを</sup>約<sup>やく</sup>言<sup>ごん</sup>敷<sup>し</sup>也<sup>なり</sup>

あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>



あはぢりくせしむのそ後さし入りあつたわひきり

左京大夫殿

年あつたはけりしつのはけりぬけぬあつた人と社に  
堀河院百三言ちりけり時

持中納言國信

くちゆつてつれの変りぬきつるあつたわひきり  
志の淡けりぬ 友原為忠納言

位若のちつこのころに我をたつたわひきりあつた

建仁元年八月の合は久志

入道藤太殿

後とてつれぬきつるあつたのくにけりぬきりあつた

うのあつたころに志久志とつたわひきりあつた

けりぬきりあつた 御製

よまのあつたあつた年月のじりあつたあつた

建保元年四月庚申久志とつたわひきりあつた

持中納言家

志のあつたあつたあつたあつたあつたあつた

赤義雅行

に我をたつたあつたあつたあつたあつたあつた

建保三年のあつたあつたあつたあつたあつた



いと光し慈路の末は用立て見せしと書し遣坂のよ  
祝部成成

遣坂此の川<sup>なかつ</sup>の道な我のゆりこ用らうのついで  
賀茂重保社頭もく言合し休けるよ慈の心を

よ名んろ

勝命法師

慈路はら子入<sup>こいり</sup>御用を我の思ふ心を成さるらん

後京侍行朝末

慈路はら<sup>こい</sup>に我國思ひてくもる人も我

歌——人

指中納言も言

伊まの海まの<sup>こい</sup>に遣しと書かすは光し

森連法師

おの海まの<sup>こい</sup>に遣しと書かすは光し

入道二品親王家又十三年の室の姫也

参議雅行

うらまふなまの<sup>こい</sup>に遣しと書かすは光し

正二位和家

うらまふく我身のこい<sup>こい</sup>に遣しと書かすは光し

用白丸を家百首思也

源山家長朝末

とらまふや<sup>こい</sup>に遣しと書かすは光し



意よりよき体くらゝ 後京極能朝夫

殿をいぬみしゆり我より舟のわらわら地いひ也なり

宗也法師

志新よりしを舟入江くそとよのときく人を志し

殿百門院人捕

うりけらよき浦浪りけつのもよふもあらう御をさやま

宗徳院付うのよのこも思意言いりま

にいつとけりま 皇太后又太史後成

我意に浪り子儀のりま機いしとけり我に知人いふ

堀け院付殿らよく影をさくわくすまの

よみかけりしとけりゆをよみかけり

持中納言國信

うししと美いしとるす内の浦も焼垣の内の地をくれ

家百も言漢休けりま不造り意のんを

後法時寺入道前用白太政大臣

我意にわらうのうしと見しをくのもとあらう御小

百も言ちりけりは意言

入道前太政大臣

そえり人の心に思ふしよと思ふしのをさくれり

後京極持政家より百も言のりしとけりま意

三つ 高松院右衛門佐

磯ふじむわよのーくをぬじーをさうあうく洞ほら

後京隆信朝未

よーもふがくゆーあさ我袖でまひひすつ、思流の下草

歌ーしす 正三位家隆

考の浪大入はよゆふとに草のどけりまーく入るあし

あつりーけり 前大納言隆房

へれあしをわがよけし思草思ひまろくおのゆさる

女のゆりちをぬくにりーけり

丸を中ねる衛

にへてまいたまきとまじ野の尾むつまの草はあう

思をこくちりくう後休けり思草をよん

前中納言國道

まごよのいしくあちの思草をいふもむがまいに秋

思の心を後休けり 後京朝氏朝未

うーと草まゆかひこのよれんのいにとつ、思思ひんち

百言言後休けりよ不違思

用白丸大未

いにまのいれあさ中の思草よす、思袖よなをくー

百言言ちりけり思の

入道前左政人未

わがよき草を野よりとりしゆらうのなれ果をよき

赤嶺雅行

みづのわらわりのよきをかつとあつよと思物〜と思〜これ  
清や〜とわらわりのよきをわらわりのよきをわらわりのよき

建保六年の裏書今念三

正三位知家

人かよら我〜びちの〜の房い〜とゆえ

娘がこころを

新勅撰和歌集卷之第十三

恋哥三

くさききのあつる女よにのりけら

實方納老

大井河のよきよよよい水をたや〜と我〜よ歌をた

女よにのりけら人よかりわ〜と後述けら

郁芳門内女藏

あ〜に東路をき〜と〜と常共〜と〜の道坂の周

百首より〜と御 崇徳院中製

恋〜とものし〜と〜の〜とわ〜とわ〜と〜と

後は惟ち入道前用白家百三言後付け不初

逢一志 皇令后官左史後成

思ひよ命下るすいひるくくふに抄ひる言を由こは

皇嘉門内別書

うれこころくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

は惟ち入道前用白家百三言日

基後

かにこれに信うきくくくくくくくくくくくくくく

歌一巻す 謙徳云

るり此もわいれくくくくくくくくくくくくくく

京極前用白家肥後

へめくくくく升れくくくくくくくくくくくくくく

後初の内を 土御門内人共

き思くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

八条内舎人

逢事そ又い縁すくくくくくくくくくくくくくく

家百首三言のりとゆけり

用白左大夫

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

中宮女お

そのおぼしきいづれがわづらひしに思ひまきし鳥鳴く

源有長納女

物さそくのまうしむ思鳥言も鳴くうしりくる明さのそ

意言讀はる中し 持人納言家良

うみけらうつわものさしひまうたに鳥のひは別え

有明の比まのこしは遠くころ人まうつりけら

相換

明くはあし一月と入也しんを成るうえのそううし

陽成地言合し 讀人しす

おご思ふ命はくと鬼のつら我の名をいづくうら華

歌しす

明じしものまはく白妙の毛の多枕いよこわあ

家言合し 後京極持政前太政大臣

つと我の契つをねおれ小まけ月の子をなうと

曉意のんそよと依けりよ

鎌倉右大臣

さしらよ家のりるくはさるる鳴しは清や後し

意言讀はけるし 八条院高倉

思我のやししそくそみえけりしはつとあつと神小

内大臣

おぼろふと乃神のつらねのししをちりちりおぼろふの言

権大納言忠信

契をくまぬ命を恨てし嘆りけて身をのこさる

たの中將基良

今してつらねの身とをまらさみの一のあえ

前用白家言今又言の色と色とくを後

中官共持

嘆の夕にをまらさる家のあさるを

よま百番言言よ 休後具言母

と我なりし女の死しては朝家のそとわ(忠床)清忠

堀河院よ百言歌なりはる時後朝意

京極前用白家肥後

松河のきれし流るるかきつ明すいなるよ言をゆは

後信性七入道前用白家百言言

身入后又右史後成

こちをけりしはしういししし浪もあれし言成結ん

二条院よ百言言なりけり時後朝意

太宰大貳重家

逢みくしゆわしこのなけしうかきし神よ井し

用白左大夫家百言言後朝意

源家長納本

きぬへのいさよめりまたれぬ神の別をりり初乞  
別をりり人をよめは

法中幸清

遠坂此々に老鳥とつれちをうさわとて鳴りり乞  
懇切意こり人を淡休けり

後京隆祐

いよき言を結つる命こは信りみゆ忠方成歌けり

歌一子

あめは師

清くつと言結物そ一は我忠るまにけり人いなるる我

よき人一子

よつこも言しとてきて明多あしけこの思ひ後留るは

持大納言實國

現し言しとて我つこいしよいことまねけり別は

女のせしよりぬりてけりけり

謙徳

あよみといつる方この忠忠をこそ所なまけり人ら

歌一子

仔細

相みくもいし思ひたるやぶり人まよのこつ初なる我ら

中納言兼輔

ちのめれわく我は美い思我をいじらわの思我う思ふ

源宗平納末

白雲のそくは結まれ納ふいみすう中くまへりあけら

女のせしよりゆりくつりけら

業平納末

我をく下むさくか納ふの夕をほく思もまらる

歌一十

延喜御歌

わそのとる我はちをうあ思よと違よとを言とる

朝ようりけら

太皇太后敦道親王

思ふにゆめゆめし思ふにけり思ふにみらん

り

和泉式部

よのつひまもて更なわたりとてあを思ふを我を

歌一十

思ふにみくみくし思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに

謙徳ら

ものひようとあ一月歌の乃うと其かしてあき

家言合は知意のんを

後京極橋の前をぬた

み一人の福くそ我髪の面歌は潤くことよのよゆら

晝意

大和守有家



雲こりる面こたるとしあまののあましみよあつや子也

慈あま言こと淡うき休やす多た 中納言親宗

ううののららるるるるののささししよよののああををみみるる也

後京極持政家百首言淡休けり

小休短

せせののあありりるるををあありりててししかかままううりりししややふふををここししやや

いいちちりり一一ははううののあありりししうう我わ之のににここをを我わはは

慈あま言こと淡うき休やす多た 辰三位持政

毛もふふののららりりししもも多たくく潤うるめめのの後のももええここううるる也

清浦朝長

いいちちくく慈あま言こと淡うき休やす多たののららりりしし又またももううととよよののああ

久世百首言淡休けり慈あま言こと淡うき休やす多た

堀川

ああののししみみいいんんののししららるるわわははいいたたちちののててああののああもも

百首言淡休けり慈あま言こと淡うき休やす多た

藤原白

みみののししららるるははううつつははわわくく我わららああらら中のああののああもも

権大納言忠信

つつののししららるるははううつつははわわくく我わららああらら中のああののああもも

慈あま言こと淡うき休やす多た 後京永克

まわしめぬいしと世にいひまのしにけりて候りしを

師光言をいふけり。志の心をよめる

後京隆信頼也

まゝるし後のこと世にいひまのしにけりて候りしを

後信性も入道前用白家百三三

後志法師

雙の鳥う思ひにけりしことよりいふるふりしを

歌一十 淡人一十

型の流のこころにけりしことよりいふるふりしを

二重流白も后文志隆

まゝるし後のこと世にいひまのしにけりて候りしを

建礼門院右京大夫

志の流のこころにけりしことよりいふるふりしを

けりしことよりいふるふりしを

けりしことよりいふるふりしを

志の流のこころに

志の流のこころにけりしことよりいふるふりしを

志の流のこころに

志の流のこころにけりしことよりいふるふりしを

百首言をいふけり。志の心をよめる

後京隆信頼也

調きく神よ思入てわらわしるるも多るる因  
浮舟れぬりも志く思浪流まかへ面敷のく思り  
念

式子内親と

つこもぶのむとの成より浪の紅なりしるるにがく思神赤

建保六年内事表言有る思言

前内大夫

相鳴らつた方のきこよと塩の塩のすをよくと赤

指中納言定家

思人を思にがの浦のたるきよとやよとの方と赤

歌

指中納言長方

思人のきこよの塩ひよむとらわらわしるる神を思

正三位家隆

ふり我力に浪きこよとみさうらるるの塩凡

平忠度納言

思の光に思よにわらわのうと思に思に思の思赤

源家長納言

思の思に思の思の思の思の思の思の思の思

真昭法師

思の思に思の思の思の思の思の思の思の思

百三の思の思の思の思の思の思の思の思

正三位家衡

つゝ意いわけくともきくしと二入<sup>引</sup>りあをく我袖は流うりける

歌一しり

鎌倉右大臣

まゝ留ちいづ人のふれねの文乃うらうらよめを思ふこころのふ

ゆふたよゆける時家は百そまう<sup>よ</sup>淡休けるよ名を

意こいふんを

藤原白

とくふは層板ののむかひしつるをさすし後<sup>み</sup>れおし

しりう野う入のふれあこ家よしあつこめ無袖の上を

持中納言定家

ちうくくは志士のころあさう我こみく室のうまも都るは

正三位家隆

是れは流いわけの志はに身うさるよあ我て

あつこる

新勅撰和詩集卷第十四

魚舟曰

魚——舟

人磨

夕よ我が老き面をこぼしよよとて今もおぼえは  
是世のく下凡なるこころもたぬかこころもた

可

こ世人をまじこゑりてつる者のまじこ言世つら  
ゆめもこ思ひ付さういふと先房より外よりわがこ

有 在東伝春

馬我るこ思ふ人のるふいふさういふ思物をも  
讀人——舟

讀人——舟

こころをこ思ひ付さういふと先房より外よりわがこ

女——舟

謙徳

思ふこ下ゆめをの解つて我を人のまじよめり

魚——舟

延喜御製

けむりく交ぬさういふ草よわと人の心を我よくり

九条右大臣

しつら野の中をわけて橋うめも世のまじこ

とみ人——舟

あにこらす野の涼よこらす老あつこのこ

梓弓をこゝひし昔よりんあはよりみしあを  
伊勢のあはれ朝な夕なよかひくさふあつひの思ひ  
ゆづりてきこひにさしひのさひにけはせりやうわこころ思  
逢坂の用いありこころもまこと我らこそをりて我あはれ  
あはれにけりけり 吾ら元良親王

ゆり 平中貞女

用河の志願をくみ水をあこころ思入のさみゆらんを  
歌一十 よみ人一十

ひ

桐あつのおみ下草屋しあはれあはれゆえちやいさるは  
あはれのこころもあはれしつう野の我がゆりの草葉を  
今りて思ひく草のさおをこころ思入のさみゆらんを  
人丸

あはれ乃道むけり我ら遠くても人をみたりて  
よみ人一十

夕ふ我道うさくし月結く人我つらきころのあはれ  
額田王

あまにこつら急を我ら我宿のすも我ころへ娘月う吹  
生世忠冬

あつてこころ白あまかひるあはれあはれ草は  
危

みじ福

とて思ひ入りしわが思ひ丸くおのゝるるをわがけき

采女<sup>さいにょ</sup>ゆらよて右左のしりぞきしよれ采

女<sup>にょ</sup>人を結<sup>むす</sup>けりよむかひよきよきよきよ

我<sup>わが</sup>に  
采女<sup>さいにょ</sup>月<sup>つき</sup>日<sup>ひ</sup>音

みづこよよとて我思<sup>わがし</sup>のよきよきよきよきよ

右<sup>みぎ</sup>左<sup>ひだり</sup>のし方<sup>かた</sup>よきよきよきよきよきよ

九<sup>く</sup>条<sup>じょう</sup>者<sup>もの</sup>又<sup>また</sup>長<sup>なが</sup>みおにけりよきよきよ

右<sup>みぎ</sup>邊

わいさすは涙<sup>なみだ</sup>し極<sup>たぎ</sup>思<sup>し</sup>ひおくうけりよきよきよ

清<sup>きよ</sup>慎<sup>しん</sup>をサ<sup>サ</sup>将<sup>まさ</sup>とけりよきよきよ

式<sup>しき</sup>又<sup>また</sup>教<sup>しやく</sup>を親<sup>おん</sup>王<sup>おう</sup>家<sup>か</sup>人<sup>にん</sup>和

あつこの外<sup>がわ</sup>よきよきよきよきよきよ

のいそめ思<sup>し</sup>ひけりよきよ

字<sup>あざ</sup>子<sup>こ</sup>内<sup>うち</sup>親<sup>おん</sup>王<sup>おう</sup>

かきけり草<sup>くさ</sup>のよきよきよきよきよ

中<sup>ちゆう</sup>務<sup>む</sup>

あつこの人<sup>ひと</sup>のよきよきよきよきよ

有<sup>あ</sup>りよきよきよきよきよきよ

歌<sup>うた</sup>しす

二<sup>ふた</sup>条<sup>じょう</sup>又<sup>また</sup>長<sup>なが</sup>式<sup>しき</sup>

凡吹い〜〜〜  
あ〜〜か〜世の外を〜  
堀河地日敷書乃三や〜

周防の体

人納言忠教

奥一の〜〜草枯〜  
月敷書〜〜後休け

権中納言俊忠

み鳩江の〜〜  
百三三の〜〜後休け

前納白

洞けみる〜神よ〜  
〜〜思ふ物〜神の〜  
〜〜  
〜〜

前入納言隆房

あまの〜〜  
〜〜  
〜〜

直姫門院丹後



みづみづは人の心におもひく我のこゝろをけりて草の

後惠法師

馬のゆくは我のこゝろをけりて草の

逢不遇 意の心を 二条院 灌枝

月のみくはかりんを白雲のきこしむるもいかに

歌しし子 入道 藤を政人

ワのゆくはきこしむるもいかに草の

鎌倉 老女

つゝはわがもろのこゝろをけりて草の

藤人 納言 隆房

ゆきつはこゝろをけりて草の

森 運法師

花すこゝろをけりて草の

夏 京行 能納

長月のこゝろをけりて草の

宮 じつ

さつきはこゝろをけりて草の

い 孝 隆 老 女

吹しはこゝろをけりて草の

後 惠 法 師



はる幸清

うきうきと肩つとてわわりの栞をたはなをのよきよ

寂蓮法師

恨しい思ふことつみる師を面けの志をみる

後蓮法師

とふふにわらふもいり後の世にわらふもいり

左と中ねる衛

契いさむはよりうらみとわらふてその面氣は信じてゆら

前大納言忠良

世にうらみとわらふてその面氣は信じてゆら

歌一八

みわれの宣言

大なる喜おほきし人となりてわらふてその面氣は信じてゆら

和泉式部

みよと喜よろこびも人となりてわらふてその面氣は信じてゆら

ちりのわらふと栞しりらちりてわらふてその面氣は信じてゆら

九条を政人兼中將に依ける時たてて後栞

日松ひまつうらみとわらふてその面氣は信じてゆら

信中納言定頼ちゆうなごん じやうらい女め

ふまのふにわらふてその面氣は信じてゆら

真子まこ成なりなりなり藤原恒真ふじわら へいけん女め





月乃うらみうつゝのさゝを思ひて国の河をわちうらむ

湯原と

うらみうらみうらみうらみ月乃のうらみうらみうらみ

貫

こゝろを月乃のうらみうらみうらみのよこしは我が氣をこゝろし

和泉外郎

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

赤坂車門

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

太宰大貳高吉

思ひつゝうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

道信切た

わらわは月乃のうらみうらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

よみ人

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

相模

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ

堀河院中官と伝

うらみうらみうらみうらみうらみうらみ

あつころ毛の雲わの月あしをくい思ふの乳のみが  
月麻意こしくんをよき休ける

皇太后文太皇太后

あつころのあしをくい思ふの乳のみが

女史百番言合よ 二冬元灌夜

更よをつとちれつあめりあまるる月あしをくい思ふの乳のみが

建保六年の裏言合よ

赤陽門院越前

あつころをくい思ふの乳のみが

女史百番言合よ 正二位家隆

あつころのあしをくい思ふの乳のみが

殿富門院大輔

あつころのあしをくい思ふの乳のみが

授人納言家良

あつころのあしをくい思ふの乳のみが

後京極持政家言合よ 正三位家隆

授人納言家良

あつころのあしをくい思ふの乳のみが

建暦二年二十言合よ 正三位家隆

授人納言家良

池よす心そ一切このえは月神のこころよましくうら  
懐意こころんを懐けけ

大納言有家

懐衣のすそ落いじやうくつて月をうみにけらる切のえ

百首うよ 式子の親王

いりよきそ落うらまはれて思ひやうと床のよ枕の袖

歌し子 大納言實家

うらかけこいりし袖よし思ひてそをもみてはてはる

左と中のお衡

思ひぬの我のこころよそ落まわひえうら懐うらまこ

参議雅經

歌よひ思ひの袖は懐ひく思ひとそそ思ふとらほ

正三位家隆

いたき志りうら思ふ袖とふよりわの愛をうまえ

殷富門院大輔

伊よませい今つこころのわかしを思ひうらよみてねさな

法橋政昭

いりよきそ落うらまはれて思ひやうと床のよ枕の袖

通母法師

うらませい今つこころのわかしを思ひうらよみてねさな



史百番言合よ  
二重虎贲女

衣えんくらしる子けけりちき衣ちきアトうううううの春のくれ夏

衣ちき言い淡たん休けけりよ  
夏京重形女

衣ちきアトうううううの春のくれ夏

夏衣ちき言い淡たん休けけりよ

梅家使兼宗

夏なつりりとわわくらられれそのその物ものををににここととをを我わが思しひひのの

衣ちき言い淡たん休けけりよ  
指大納言家良

麻あしののここににわわののここよよののああいいくくををとと切きりり

建保六年の裏言合意可

指中納言家良

逢あいいししいい思しよよのの衣えああいい我わが命いのちししゆゆれれけけららくく夏なつよよみみここれれ初はつめめ

後三位範宗

いいままききししははををあありりののここのの衣え人ひとももここののああいい袖そでののああららをを

衣ちき言い淡たん休けけりよ  
后三位範宗

そそのの衣えああららくくいいままのの蝉せみのの羽はももああららににかかとといいひひ

麻用白家言合よ山家夕意こころんをよこ

休やすけけりり  
后三位範宗

りり衣え乃のここのの衣え女むすめくく我わがををああららくくいいままのの衣えアアトトいいすす

建保三年の裏言合よ

後京信實納札

東路の多の志いふ事いふにけしと思はしむにけし  
んるし中しはけし女にけし

大宮入道内大夫

浦北うらきたけのよそに年ぬれにけし  
家より今日取意こしんを談休けし

後京極持政前左大臣

袖乃波しりの燈を我もみく  
を中將公衛

乞しん

左を中將公衛

夕ゆふ野のをみくしにけし  
を中將公衛

京極前守の家より今日取意の心

大納言忠教

乞しんを我もみくしにけし  
乞しんを我もみくしにけし

乞しんを我もみくしにけし

後京極持政家より今日取意の心

大納言忠教

乞しんを我もみくしにけし

乞しん

大納言忠教

乞しんを我もみくしにけし

又百番奇合に 按察使兼宗

人々本業ありしをわが我の川も又のわけさ

百番奇合に 人物此門有る未

いづくにおいなるもよき子とてわがよめ換りぬ

皇太后官を更後成

いづれもわがのうらなうらぬ恨もわが子とて

待賢門池堀川

うらみはわがのあはれに思はれしをいづれとて

歌一とす 仁徳天皇

ちかちかむねの月日の思はれ申はぬいづれと

歌一とす 仁徳天皇

藤原賢季納本

偽の心もわがに何さつとてわが方の形もいづれ

歌一とす 仁徳天皇

はの國のこころにわが心はわが心はわが心

源具親納本

後世をその心形もと有るありてわが心はわが心

歌一とす 仁徳天皇

はの心もわが心はわが心はわが心

律を行國

建しの今のを其月日に成るの方に恨え

質茂季保

月をも信ま向つて後の昔のに成すけらか

希會意にいふを淡ける

淨意法師

きの西の方に後にいていて契らむをつと

右馬門考為家百三のよといふけら意の言

下野

つと東のありまつて後の契らむの言を

用白左大長家百三の言も違不合意

後三位範宗

年をいて後のいていて東の言をいたらむを

意十三三の言も違不合意

権中納言実家

後の義のいていて東の言をいたらむを

百三の言も違不合意

後京極持政藤左衛門大夫

ういろいのむに春く我て人と柄に似たらむ

延保六年の裏の言

藤原白

同のまゝに見て嘆わすうにむくむ花も多かきなり  
中納言定頼のうらそくうううううううううううう  
けれいようめう  
まう人うう人

わう人のめうらそくううううううううううううううう  
謙徳の舞人みおよはけの時原時繁の舞人  
うう雪のうううううううううううううううううう  
前まへにうらそくううううううううううううううううう

何ううううううううううううううううううううう  
印人舞人うううううううううううううううううう  
はけれい  
本座は辰

すう衣きううううううううううううううううううう  
雪のうううううううううううううううううううう

天曆御製

きううう雪のうううううううううううううううう  
はけれい  
更衣正地

きうの衣乃ねえいふういむううううううううううう  
あういううううう  
中納言朝忠

かう我てのきううううううううううううううううう  
えうううう  
光孝天皇御製

うううううううううううううううううううううう

長もけしにほしきうさほけのあきあ

さわけれの物にけりけり

はねも入道前持のあきあ

よもいさあふよわけらけりてほのほのほ

けり

あきあ

うさけりてあきあき水鶏のあきあ

あきあ

あきあ

あきああきああきああきああきあ

あきあ

あきああきああきああきああきあ

新勅撰和詩集卷第十六

雜歌一

春のりりや鶯のさうくはけけり

選子の歌

し里のむかしやいのにふれりても成なるは鶯のさう

歌一しり

選子の親と家持律

雪多しはふの里は後人かよじやるやまをくは

式子内祝

雪流くうはれし初草のむけに野へ春のこよを

み草を後休る

入道二不親と道助

春日野はゆきもくはぬるまは始みくは萩の焼系

前大信正慈因

しうの春のうきもくはぬるまは始みくは萩の焼系

歌一ぬす

殷富門院大輔

命もくはれしし定む思ひ春も成にけり

千又百番言言

二重虎譜

こつぬまは花こみししうの白雪きこりし

歌一しり

拙家俊隆衛

新く我なりしうきもくはぬるまは昔のわしのみゆらぬ

権大納言家良

みづののののとし考しに方わらむ其年うあぢく  
開はたまた家百言のよと休けるしを考よめ

中宮女お

さとしのまは女のくあつとてに氣をよめし考れし  
寿辰の比りし梅花をよめ休ける

吉成門内大夫

かきよかりし也梅のむみくうりし昔の考い  
煎用白ゆ大夫よ休ける時百言のよと休ける  
よを梅をよめり 源信のう納た  
寄りし梅のころえりていれりてしは白ゆ

歌一十

下野

有明<sup>張</sup>月<sup>張</sup>はるるこくもたてしめし梅のう  
行人念は師

梅乃つつ里つ子白ふよわささまも也考はう  
百言のよと休ける考言

休辰具守

考の月子めろ也れ梅のよはしとて也人う  
吉成門内大夫の考月をよと休ける

辰明門内小宰相

大つこの歳は月うくもりし物思ふ人のなをる



東にありわかく後をあみく

麻大納言忠良

思おもひて我力わがぢからもるこころも信しん音ねるらうくくく  
あ周まわちもくくくく後うしろにける考かうり

入道麻大納言

くくく考かうに尾おもくくく心こころの考かうとくくく  
故ゆゑに花はなこくくを後うしろにける

祝戸成茂

考かうとくく志し質しつの考かうの白しろ子この河かを都みやこちくくく

歌うた〜〜

如願法師

あさちわくくく梅うめをみくく人のくくく  
世よ代のついでついでてついでくくく里さとににくくく  
けくく考かうとくくく

麻大納言克頼

いいくく考かうとくくく我わが人ひとのくくく  
二冬ふゆ池いけ止とどめ殿とのよよはるくくく我わがててににける  
糸いと乃の舞ま人ひとくくく南みなみ殿とのの考かうをみくくく丹波たんぱ  
くくくくく

藤原隆信朝臣

わくくくく我わがの考かうのくくく

世々のつれて桜梅霞さしまうて一ゆけり  
大うらの花枝梢さうりやよみゆけるを思ひて  
つひみゆくおぬのもしはにりけり

皇太后又女使後成

いあいの言わぬむに意のこも成思れし  
ゆり  
戻之位頼政

中わをるむとじりと思わつとるさかと思  
後名師より所のわやり方ゆりけり  
とみく後ゆり  
宋延法師  
うへみじりつとよはほけり人さかむのふふ

世をみく後ゆり 平重時

年しよみじりなる木の梅花つ世のうらに後のおまし  
源光朝

力乃しよ花のうらなる木のしよ考より後の思めえ  
歌しよゆ 夏原新氏納未

志しよ乃ねしよしよ考しよ世ええにたれて  
花言後ゆり 麻大信正意同

よの野らるしよかむさう又わくりる力え  
落也と後ゆり 入道麻大信正

花しよ乃のなれ雪やそるありゆわうり力るあり

周居花ごころんをよと休ける

梅窓使兼宗

いしく花と雪ごう古く花をの告げにわくはける

歌一十

休辰具定母

めくありわし我のの命ごにんよりやふ春の言りハ

夏原信實納本

言の目えをうまのきりごと春の別いふひとる

今皇太后宮人貳日月は用うる梅を折てい

り休けれ

京極前用白家肥後

春のりよ契をこころよりこころ我入白あむよこりや

日月春の日養日しきく女ようりける

夏原信實納本

思ふやうのこころはわの草りきとよまらるる花に

歌一十

相授

江うて人よきと夏草の上げくと物を思ふこころ

夕月東あしむ種よこころの鳴休けれ

と東門院女お

天乃まの月のしんちうおしとつちろふよこころ火鶴

歌一

世志式尸

榎のうらけとてやとあふ月影はをわすせ叩くひをえ

ア一をいふけりしすしの又月音くまな  
らとゆららにりかへて後休けり

右通人持道徳母

かへれ也いぬいりけりわぐり草はふきつひる人由  
片ぬり

妻三多所

わぐり草はふきつひる人由  
あふいしひる人

檀中納言定頼

又月雨のれりしむあふり秘は世より我に袖うぬけり  
又月雨と後休けり

友系引能納夫

と場江のぬりしむあふりしむいごり後らるる又月雨はえ

友月をよめり

友系親康

とれくぬりしむあふりしむいごり後らるる又月雨を  
秘は世より我に袖うぬけり

祝部成茂

吹凡は疾れうぬぬのこころすはぬまを後休けり

檀女信都良仙

世をいしむぬりしむあふりしむいごり後らるる又月雨を  
とれくぬりしむあふりしむいごり後らるる又月雨を

友系信實納夫

かへれ也いぬいりけりわぐり草はふきつひる人由



天のしきまのわらうとよまにみえ昔のわしをあらは月のお  
又たさう後ゆけりか

に和ち二おは親と守覚

昔思ふらうらうとよまにみえ月をい袖のわらうとよま

えいしす 鎌倉右人夫

あこち系曲らうらうとよまの面よ哀しくよの月をよま

思ひわらうらうとよま袖のわらうとよまわらうとよま

月前懐旧ごころんをよまゆけり

入道前をぬ人夫

詠片らゆらうらうとよま世中よいししりの月にはしし

家よあやうらうとよまゆけり娘三

入道二お親と道助

此里の折の葉よまらうらう月のしりの世に秋をよま

元暦の比りに賀屋重保人よまうらうとよま

祐頼のうらうとよまゆけり月をよま

権中納言山家

あへらうらうとよま昔れ娘をいゆらうとよまのこら月のを

秋序彈のいかによまうらうとよま月をみゆて里

わらうとよまわらうとよまゆけり

高井上人

月氣いに我がのよこつとてすもみまひりてすもみまひり  
後<sup>のち</sup>は<sup>これ</sup>言をみとけけ我がはえら

法京超清

いづち<sup>ま</sup>もよ月の時<sup>とき</sup>もよええのこよい<sup>ま</sup>し<sup>て</sup>の<sup>う</sup>し<sup>て</sup>  
世<sup>よ</sup>のつれ<sup>て</sup>も野のよ<sup>は</sup>は<sup>な</sup>け<sup>け</sup>の時<sup>とき</sup>もえら

春儀成頼

高野<sup>たか</sup>の<sup>の</sup>く<sup>く</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>人<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>同<sup>どう</sup>子<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>静<sup>しず</sup>に<sup>に</sup>の<sup>の</sup>月<sup>つき</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>ま

歌<sup>うた</sup>一<sup>いつ</sup>子<sup>こ</sup>

お新法師

わ<sup>わ</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>つ<sup>つ</sup>の<sup>の</sup>ん<sup>ん</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>し<sup>し</sup>の<sup>の</sup>月<sup>つき</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>

法京超清

わ<sup>わ</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>つ<sup>つ</sup>の<sup>の</sup>ん<sup>ん</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>し<sup>し</sup>の<sup>の</sup>月<sup>つき</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>

正三后家隆

先<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>我<sup>われ</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>つ<sup>つ</sup>の<sup>の</sup>ん<sup>ん</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>し<sup>し</sup>の<sup>の</sup>月<sup>つき</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>

源家長朝長

馬<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>我<sup>われ</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>つ<sup>つ</sup>の<sup>の</sup>ん<sup>ん</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>し<sup>し</sup>の<sup>の</sup>月<sup>つき</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>

宗延法師

い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>娘<sup>むすめ</sup>を<sup>を</sup>お<sup>お</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup>の<sup>の</sup>月<sup>つき</sup>の<sup>の</sup>わ<sup>わ</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>

法京超清

い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>娘<sup>むすめ</sup>を<sup>を</sup>お<sup>お</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup>の<sup>の</sup>月<sup>つき</sup>の<sup>の</sup>わ<sup>わ</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>

殷富門院大輔

今にしてみえし故なき思ひの月を  
樂府を詠よくうよみ付けり後園後の心心

源光朝

円とらとけりこのおくれねのたをうらゆるとけり月を

空陽屋の心をよみ付けり

素後法師

つゞきる夕のあこちをし結結びまをうらむの月

故の月をうらむをよみけり

法下道信

も田の井のちまの月丸新ゆれ思おもへんころころあそぶ

詠一し

如新法師

の里とらはるよをうらむの文丸つひ思おもへんお笑わらへ

後原基経

さるるらこのお笑わらいもつらうらむ故を思おもへん

行人念法師

勢田せらとみらの錦にしきをうらむとくひ色のあはれ

明年叙爵すくはける故人のよめこし藤ふじ

つゝのお笑み付けりよほりかてかこ換かはけり

後原永光

人ひとの後の故ゆめを思おもへんころころあそぶ



高松城の時をけしのお糸ゆるき由甲ける人  
ひすひところお糸をつりける

建礼門院右京大夫

吹凡と枝よのしけし脚代を我ちも思お糸の糸を結み我  
麻用白ゆふきよはける竹家よ百言のよとはけり  
けり言秋の  
源有長納末

お糸く乃ちちりひくもろ文は白いけ我の居ご娘のゆくと  
建保三年八月言旨は晴時をこりらんを後  
ける  
権人納言忠信

晴あつこころみく人ひり我そころそくくわさちの  
若

高階宗仲

平公

村中いまこ思て思ふよわはるにきりあつと月の月  
かそよたつつ方両るありして思危おぼくの枯れ冬もろして

歌しり

源泰光納末

冬言淡休ける

相摸

枝葉ちるうら乃凡の吹ふくわいるもくさくそ屋やはるは地  
歎なげく事休けるはもみらのちる成みくよと休

けり

麻人納言るに

お糸くしるもくころひくもろぬい昔をくらふる泪なみだるちを  
冬言里はわく大納言三位よつりける

うららけの氷のつゆをきりて鴨乃うら毛にうらまをらね

也一

辰三後庵子

うららけの友なるはのたまひにひかへてかきうらうらな

歌一十

相換

きりくをひかりて月すこきよき鳥うらうらな

大桑右大臣小忌守宰相くお休けり納言に

りけり

康賢と母

きりくを思ひ思ひや日花のかつてうらうらな

也一

大桑右大臣

おつとくを十ヶけりなをのたまひて

新嘗會を淡休けり

中納言家持

是引乃下りてをかきなるるる梅を思ひ

百三十一

式子に祝し

天はつと物をしらるる乃くまきあめをゆり月影

忠良乃は檢中納言定頼はよきあひけり

にりけり

淡人十

り影とてそ乃うらうらな思ひあめをゆり月影

歌まゆりてわらわらけり雪の初皇を后

また史後成りしよりしける

右之中持ら衛

冬より初まりて後よりしける雪のうらにそくす川に流

歌一節子 伊藤大補

冬より初まりて後よりしける雪のうらにそくす川に流

年の言は終りて終りて終りて終りて終りて終りて終り

冬より初まりて後よりしける雪のうらにそくす川に流

冬より初まりて後よりしける雪のうらにそくす川に流

冬より初まりて後よりしける雪のうらにそくす川に流

冬より初まりて後よりしける雪のうらにそくす川に流

歌一節子 殷富門初大補

冬より初まりて後よりしける雪のうらにそくす川に流

冬より初まりて後よりしける雪のうらにそくす川に流

冬より初まりて後よりしける雪のうらにそくす川に流

冬より初まりて後よりしける雪のうらにそくす川に流

冬より初まりて後よりしける雪のうらにそくす川に流

冬より初まりて後よりしける雪のうらにそくす川に流

冬より初まりて後よりしける雪のうらにそくす川に流

冬より初まりて後よりしける雪のうらにそくす川に流

冬より初まりて後よりしける雪のうらにそくす川に流

舟超法師

雪のふりしは流のそそをたふれいふつのはちりよけりハ

歌——子

相換

かうわれい年のかりかよはにうかうの異り

いしはちり貴

新勅撰和歌集卷第十七

雜歌二

歌——子

業平朝臣

つ初草の店はわねはらうれ屋のやうなをり  
よふしはうきうきとふれふはしんよけれ

讀人不名

あはげのよのこまを思ひて歌をほく年うらよをり

和泉小部

更よ又よをうきふらうきとるけぬ何のわがふし  
いとまぢるのこころはれはれはれはれはれはれはれはれ

相後  
さつみ

あつら系野つこよわつら居すあは信まうこふおんいん  
あふ我もめれつこわ有ふ今いりつわのこまき舞  
後お納也

あつら系野つこよわつら居すあは信まうこふおんいん  
あふ我もめれつこわ有ふ今いりつわのこまき舞  
後お納也

基後

あつら系野つこよわつら居すあは信まうこふおんいん  
あふ我もめれつこわ有ふ今いりつわのこまき舞  
後お納也

成尋は行母

あつら系野つこよわつら居すあは信まうこふおんいん  
あふ我もめれつこわ有ふ今いりつわのこまき舞  
後お納也

鎌倉右大臣

あつら系野つこよわつら居すあは信まうこふおんいん  
あふ我もめれつこわ有ふ今いりつわのこまき舞  
後お納也

百三の中は連懐 惟明親日

あつら系野つこよわつら居すあは信まうこふおんいん  
あふ我もめれつこわ有ふ今いりつわのこまき舞  
後お納也

前大納言忠良

あつら系野つこよわつら居すあは信まうこふおんいん  
あふ我もめれつこわ有ふ今いりつわのこまき舞  
後お納也

皇太后及大史後成

春日といふにちるれ、香木の寸草を木のこちとて  
河原の海をすくふの水にん子先我思ふ事書して我

源師光

れまよわぬ力とてとくすくすくちりてか引統  
年つゝゆけつは初く百さう漢休けり述懐

三ッ

亦大僧正慈日

うしら我三益乃とをわよち力なうるよ思我ぬれん

歌一子

大僧正新尊

かりうご思ひおめ世中ら何ゆに思ちちんちるん

僧正の意

いぬいぬ言十の坂もくもつと昔とてとて思ふ先ちた

如影法師

潤くく飛ぶそつとけいじう衣きとわくと思ふ初小

後原光俊初来

あつるつわの理ごいあつとて昔とて人うらまを

寿衣の比りい思ひぬりかかえ人ようりけり

後徳大寺大光

あつるつわの理ごいあつとて昔とて人うらまを

ちんちんあつとて昔とて人うらまを

後法性寺入道兼用白右大臣下

長房フナト著ききさひよ思ふにうしろ思つて我にけらうとあり  
塗懷のふとよみはける。

左を中ねと傳

力乃野ノノくいりよるし人へ我思ふよとけりなるしとを

歌——予

後京極持政前右大臣ト

三十一に上るに傳つて世中は人の心のまじりてとくも

兼道法師

はくもと又いぐせの世同どうはうと力判しにのをもたるるに(あつたむら)

文集又丁邊のふと淡はける

夏原行能しげ

しつじの燈とうこもてそ又伝はうへの心をきかへて兼道  
志り世とのつれて大原ふいるじんの谷ちしはあき  
らつとはける比能野ひのの比章の御行信養まき  
守師のつれつらむりいゆく都はあはれあ  
けらし時あの一はけれはし河のまは信まきをてのむ  
淡はける。 法京ほけ新しん登と

らうごまはしつたをめくら村河の板いたとて世よるわうしは

歌——予

平泰時

世中にわさしむるあやををつたのまはれあつたのこゝろ  
も人をもたつ時にしそあまきまらうしとはけるしは書

うつくはける

あめ法師

流しあふるうきなきをせむ南へもわつ(昔あつ)の  
あめをまきしへはあめはあひて人の文を筆の流し  
駝駒のうきうつふは世嘉の片形をまきよ  
はける  
中京師尊

ゆ大まははける時家百三十一巻懐の心を

前弁白

河波をうつくしむ人の心海うらみの泣くはあし  
そのこと懐懐にうまけりけるはあめ

御製

くつとぬくまにの心をほくく交しを昔を遠思ひ  
懐懐乃心を懐はける

ゆ大ま

いふあめをまきしへはあめはあひくはく月をうら  
定家よおほるうはて月わくは懐申はける  
そみはてわくまははける

信中納言山家女

川流し流るうき一月影も今うんたやといはれあふ  
あめ百三十一巻乃たまよ 二巻所懐波



かじりきりやーるるる林の月やちいりて成りては也と  
 後乃世のまはちるる此くくまの岩の夜よりわらわは  
 源為相一鶴庭人まくくつとの程ちく成体  
 けりは後体けり 道信納ト  
 ちら乃この程の毛交ある程で澤又年(じ)程を久くさ  
 頭中持て体ける事相も成てけりまわ成てけり  
 体乃このまじりけり

謙信ら

あつとき「おまの」おまを「て」天はるるらんらさだ  
 吾人「く」く「つ」は「て」い「く」田「く」作「し」体「け」是

後原相如

年(あ)ある言のとも成てわ〜このい〜なる澤よりまんをけり  
 同して保〜体体けり

田越虎御製

わ〜この書れとあり別也我澤は後じとゆ〜さ〜あ  
 行幸は両りわ〜人持〜年久るあ〜し〜を  
 心乃ら〜思にけ体けり

曰大長

志乃使のおこさ〜さ〜海らみら〜と句ふ〜ら毛  
 老乃後年久〜く志に〜体し〜さ〜る外は

宮庭ついで外紀の回しついでしまひわておは柴  
けりよ  
檀中納言定家

あさゆれら民乃りりこの中調物うさひきてと命あかり  
用白丸も家百も言淡ゆけら眺らと奇

百歳乃とのいけりよひくいまあじよとの七月  
建保四年百も言ちりけり

参議雅行

うれうしりくみられり神又もいあまら力か恨る  
日吉社より述懐の心をよこかけり

正三位定家

邊坂乃ゆいれをきし我しつちり人のわらひ時

曉言うし後ゆら 麻中納言定家

ゆらうくわ男入宿のちりよ身たの斗極よは

按察使隆衡

鏡乃をしと何してしり恨え今んとわをくわえ

参議雅行

力のとにわりゆく我の端長をきりゆらわ曉らる

后深宗経朝也

曉乃鏡うわしれをうらうふらうと世の差れ若ら極

上皇極也よりうらを 入る二不親と道助

もじき山嵐の道代をけれらうといぬらぬ鐘代言ハ  
 焼述懐の心をよき休けり

正三位家隆

思わぬにけりて思ふことよれ社えにまくる鐘代言ハ  
 は下光寛

为のうきを思へにけぬ焼よきとて思ふの程をきりて  
 後頼朝ト

何ごきく朽木の松のしんごきとて思ふは日言に承るる我々  
 兼好法師

けりて思ひやこきを思つ入わいのよきとて思ふ神ト  
 は橋弘賢

けりて思ひやこきを思つ入わいのよきとて思ふ神ト  
 前参議後白河

あすもあつに思ひて思ふことよれ社えにまくる鐘代言ハ  
 源光行

あすもあつに思ひて思ふことよれ社えにまくる鐘代言ハ  
 家又十の言用中燈

入道二只祝日道助

こ我の思ひも思ふことよ更て思ひやこきとて思ふは  
 后と後光宗

ちよこのあはれさうりし志のうらよほのうらけの娘も灯

述懐三つの中よよとよけ

体は具はく

あじろこも雪も年ふれさかたてこもさやわ

方聲をうらけけの光の戻すこ我てけりけ

うさつと我らあり 上西門院本巻

更よけうつくの程のるふい鐘のあまうらと我つ

歌一十

相摸

月影をらのうらよは依りいふのえおるあかえをさす

おこりらあまのけりきよわをさけうとく物を思ふとふ

後頼朝巻

かよつこわのあけぬうよ雪降さこあましつるあ

なる我声のうさしをのまかほ江に流るいこくら社まの

僧正因玄病よまにみくえけけのめよみ

ゆけ

権大信都経回

は乃道ぞ下しに第こまあうし流し行下甲さるし

文治のはりいち乃千載集えらひゆ一財

定家つとまにりすして後ゆける

そのあはれ師

わつこつ答れ下甲こ思ひきくしれは我思名いさやあえ

月時後休けり 甚末回成長

かきにびら井路のよれこののしりく朽じはをるま

寿永二年大この世志にのるくをふくは後

到く休ける言をさく家くししにのるしし

紙よ書付く休し 午行盛

ふの我てのよるくもくは我れ水のわれちるるる方清也し

歌——— 法眼宗家

私言の浦よまく我忠わよのまふ草すまこの斗に朽くも南

行念法行

まふ草かきまきにやいるるくつ方によくむつこのうら

西行は師自言を言合よにのい休て對のりあつ

ぬへ休けり。書うへくつりけり

皇々后交ちま後成

契到ちこのうのうへをこつこの浦路れわよのまふ

ぬ 西行法師

つる浦に——かまうこぬ契をいけらるるこの説ををる

源氏のも清をうこて奥よ書付く休て休けり

短一後廉子

ちらるる鳥のわく——い鳥ふたつたま——い後こもみこ

歌———

私泉武部

考<sup>こう</sup>ア<sup>ア</sup>くら<sup>くら</sup>た<sup>た</sup>ア<sup>ア</sup>笑<sup>わら</sup>ごと<sup>ごと</sup>も<sup>も</sup>き<sup>き</sup>く<sup>く</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>谷<sup>や</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>成<sup>なる</sup>堀<sup>ほり</sup>又<sup>また</sup>た<sup>た</sup>男<sup>おとこ</sup>は

貫<sup>つら</sup>く

ま<sup>ま</sup>つ<sup>つ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>娘<sup>むすめ</sup>ア<sup>ア</sup>い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>こ<sup>こ</sup>み<sup>み</sup>に<sup>に</sup>ホ<sup>ほ</sup>を<sup>を</sup>れ<sup>れ</sup>枯<sup>か</sup>木<sup>き</sup>と<sup>と</sup>世<sup>よ</sup>成<sup>なる</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>も

歌<sup>うた</sup>中<sup>なか</sup>は<sup>は</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>時<sup>とき</sup>述<sup>の</sup>懐<sup>なつか</sup>奇<sup>き</sup>

後<sup>のち</sup>京<sup>きやう</sup>極<sup>ごく</sup>持<sup>もち</sup>政<sup>せい</sup>亦<sup>また</sup>を<sup>を</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>た<sup>た</sup>ま

教<sup>しよ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>考<sup>こう</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>ふ<sup>ふ</sup>山<sup>やま</sup>木<sup>きの</sup>の<sup>の</sup>る<sup>る</sup>く<sup>く</sup>ア<sup>ア</sup>活<sup>か</sup>に<sup>に</sup>じ<sup>じ</sup>ハ<sup>ハ</sup>果<sup>は</sup>果<sup>は</sup>  
果<sup>は</sup>も<sup>も</sup>ち<sup>ち</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>え<sup>え</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>く<sup>く</sup>ア<sup>ア</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>こ<sup>こ</sup>思<sup>おも</sup>ひ<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>信<sup>しん</sup>じ<sup>じ</sup>す<sup>す</sup>

可<sup>か</sup>い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>の<sup>の</sup>思<sup>おも</sup>ひ<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>の<sup>の</sup>は<sup>は</sup>け<sup>け</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>

鎌<sup>かま</sup>倉<sup>くら</sup>右<sup>みぎ</sup>大<sup>おほ</sup>太<sup>おほ</sup>夫<sup>と</sup>

し<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>を<sup>を</sup>海<sup>うみ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>を<sup>を</sup>ち<sup>ち</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>ハ<sup>ハ</sup>ッ<sup>ッ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>

新勅撰和歌集卷第十八

雜言三

女成のつれて後四月一日は服袈裟をよめて

はねも入道前持の女成下

今切りあらまの女成よりそらそらそらそらそらそら

ゆ

は一住師子

阿比の女成よりそらそらそらそらそらそら

女成よりそらそらそらそらそらそら

ほろをすてりしとねとけりわら

天馬中宮

高亮乃よるわにこそまをそそそそそそそそ

高亮よりそらそらそらそらそらそら

集三条入道持成の女成下

毛のほりの水の中よりそらそらそらそらそら

阿比恒徳の女成よりそらそらそらそらそら

そらそらそらそらそらそらそらそら

よそよそよそよそよそよそよそ

大納言師女高亮妻

うたのみらそらそらそらそらそらそら

右を中持成信三井ちよらそらそらそら

げりし孫安東にりしとくけしとてほひけり  
ける  
一条大老室

今朝の雨とらねの雨とらまはれとるのほよとらね  
母の病も成ゆいじしをゆけり  
ききくゆける袋は衣を方ゆりくほみけり  
讀ゆける  
右と大納言徳母

草葉の曲しるるこし思ふも袖もぬるけこのなま  
伊豫集をりて人のししはしりるよ  
めり  
中務

るこ人の言のしりけりぬるまはれとて袖もぬる

ろよよこゆりて世のちるるこもする  
て讀ゆける  
大納言清隆

いひつとせいらるるこもよよいよとて  
後一巻成の后文つとれとてゆけり年の  
かの官はゆりかてよもゆける

権大納言長家

考まきつとるものもよよいよとて  
ゆり  
出羽弁

わつとて年に入つてかかぬおとるるこも  
九条右大臣つとれゆけり新嘗會のは



日女房のいりりけり

藤原高克

我が女房よこの門よりこしりまの月をそとせり  
後高元成かくれとぬけし後赤橋雅行の  
家へゆきまき乃等よしすみゆけりあり  
こゆは京よりゆきしころ也國ていりりけり

日人書

いりりしとてかたは思しと都をさるるに  
ぬり  
まじいりしとてかたは思しと都をさるるに

左と中持雅清

まじいりしとてかたは思しと都をさるるに  
すまのしとてかたは思しと都をさるるに  
すまのしとてかたは思しと都をさるるに

号中申

指中納言國信

毛ふし車より我のよしとてかたは思しと都をさるるに  
限りしとてかたは思しと都をさるるに  
胡夕よなげしとてかたは思しと都をさるるに

ゆける

堀河院讚岐典侍

いりりしとてかたは思しと都をさるるに  
眞信ちりしとてかたは思しと都をさるるに  
ゆける

九条右大夫

けりふとみ我いじりの記あり頼りきうに命とては  
天曆八年其なきまのまゝに我きとけりて又  
七日に誦經きし勢櫛のまゝのけに下入  
て依ける

夏くつをきくまに我まうきをいしりよかむは  
式部が敷きまのまゝに我まよけるまゝに依

ける 中納言兼辨

笑むい凡ほに種れよとくく人の母より久かたなり  
後冷泉院のちやまに依けるは花柄を女房の  
洋よりけりける 大納言忠家

いりく花柄のまゝなるまゝにうりてこの袖に花に

依ける 貫

きのふゆきわひり人のまゝにのまゝにまゝに  
人丸

まののち舟乃くまき乃きよまわしに我思にうに

依ける 謙徳

白き花にけりては花房よりけりてのまゝに  
依ける

依ける 相摸

胡るる虎もやしりう家好方おしくたわが思ふつこく

後京極持政前を収めた

おしり思ふしりうのるる一はよ玉ゆりりう納家のも

入道前を収めた

しりう何しりうお入りききしりうあね休の養方の申

前大后を収めた

しりうあねのくわりのききしりう人の思ひしりうあ

後寛治師

鳥しりうよひとせきしりうかすしりうひくすりうあしりうしりう

源有房納め

御もあぐりまゆり馬をみくもね義をいりのあねを思

正三位家隆

らりうくとあすの命をねいしききのをさしりうしりうひは

あす人の鏡をゆしりうをゆけり

前大納言忠良

りうしりうみくもいしりうあす鏡りうさしりうしりうあ

歌あしりうれがしりうあせのるしりうしりうあしりうあ

辰三位佳子しりうれあしりうあね月をみくも

あしりうあ

家あしりうあしりうあしりうあしりうあしりうあしりうあ

ある人々を思ひくよきかきけり

八雲飛鳥人老

ねくよくめまの面影のあてれくよと六年の月日

こそ朝暮母方母よりけりけりけりた人のこと

にりりけり 大納言實家

よくしほくよくよくあまを我にせりけりけりけり

けり 後徳久もた人老

思くよくあつりけりけりけりけりけりけりけり

春瀬通宗朝夫方母よりけり後書日かりけり

けり又母のよきかきけりけりけりけりけり

かきけり 大納言通具

かようけりけりけりけりけりけりけりけり

身志門地く我をけりけりけりけりけりけり

けりけりけりけりけりけりけりけりけり

後法性寺入道兼國白人老

よくよくよくよくよくよくよくよくよく

母の思ひけりけりけりけりけりけり

白人老

よくよくよくよくよくよくよくよくよく

周忌もよきかきけり

ふりかゝるゝにききちを懸(ま)たしに西氣がらふりては  
中田いよににむけけるは新めお方まの笑わ  
きつて素是法師。もしもにりける

賀茂重保

切ふ乃家此つゝ方は玉なうまにきてよける人を懸上  
後京極格取うくればよける時後休ける

後系親康

うにのそきしむてを乃にのわらうらよ懸せは  
賀茂重保方ゆりて後におよ言後休ける  
よしにたみゆりあひく過友と意なきにり

ふをよみけけるよあ

覚盛法師

うらじきしむにちる宿いじうと面氣のそつあや  
世とのつれて後水也連懐こいんをよみけける

藤系親盛

かりか氣よじうと思ひ出く調をしますよのめち水  
きく

前大納言之頼

外人の情あふあらふおのいにゆすまじ世るるは  
老の後母の方ゆりけける後休ける

法下之寛

こゆりあつちかちをららの後を我らうわつて我らうわつて思ふ  
後高念沈のく我らと我らと一平の思ふ  
しと思へ淡ゆるれ

平信繁

とく我らと歌きなる一平と(思ふ)の思ふ  
老乃後述懐言淡ゆるれ

結草法師

とく我らと一平の命を恨まゝ家らるる一平の我ら  
へ吾人納言の思ひよゆるれ耐淡ゆるれ

左中将基良

わしに思我らとみをうめむく國の思ひは思ひの思ふ  
僧心籠言力まゝの思へて思ゆるゆるれ  
るこ由やとゆりゆりゆるれ耐

法下四行

いとまじかめのいよの思ひの思ひよの思ふ  
ふは思ゆるゆるれ耐

法下昭清

うらまじかよりの思ひの思ひよの思ふ  
大和基賢の思ゆるゆるれ耐  
けり淡ゆるれ  
中將右大夫家夕霧

別め...  
八月十日

夏末信實朝来

又方...  
平春時

...  
運せ法師

かく我...

文集親愛自愛...

八多所高念

あすの...

行念法師

定る...  
報恩誨...

前入信正慈因

...  
下...

...

新勅撰和詩集卷第十九

雜歌四

真子院人の口よおりのりける射勅使の  
糸いとてゆけりもしより雪ゆきのまよりけるを

みく後ごゆけり 中納言兼補

白しろき乃の左ひだりきにいぬりきふ我われ久ひさゆいふふまそ有あけり

歌うた~~~~~  
よき人~~~~~

山城乃やまぎのくまのこき後ご永代とこすの者ものいとしに娘むすめいぢり

久遠ひさののまこのあれよけりをみく後ごゆけり

みの系けいくこの都みやこいあれよをうたま人のうけりとい思おも我われ人

春日社かすがいよ百もも三みつ言ことよとてなまけりけりよ橋はし三みつ

皇太后宮大夫後成

都みやこ出でくるみとこゆる切きるまにうららるるすまに川の橋

百首もも三言みつことよとてけりよ早はや娘むすめ三言みつこと

ゆふき

吹ふくしらきたる我われ山城乃やまぎのここのまゆれ娘むすめのまに凡

建保四年百首三言もも三言みつことよとてけり

僧正行意

山城乃やまぎのここのまゆれ女むすめ海うみなるめ思おもひつとよ娘むすめ言ことわら

各所おのづか言こと後ごゆけりよ 殊こと別べつ法師



ちと車といふてのまはつらもしうあわしきりの柱の葉に

真昭法師

あすの川ふきの葉も晴しそいふていふていふていふていふて

歌

淡人

世中いふていふていふていふていふていふていふていふて

中納言家持

ふ島あくまのふのふ世世はふふふふふふふふふふふふ

入道藤太政大臣

考いむあふ雲ていふていふていふていふていふていふて

三位家隆

あふふいふ世世世世世世世世世世世世世世世世世世

藤原白家言合口各所月

源家長朝夫

ういふていふていふていふていふていふていふていふて

百首言淡人

後京極持政藤太政大臣

久う乃重あふふいふていふていふていふていふていふて

歌

よき人

いふていふていふていふていふていふていふていふて

和泉式部

すみより乃有明の月をちのむ我いふていふていふていふて



正三位家隆

いよの海乃わよの海く〜  
いよの海乃わよの海く〜  
いよの海乃わよの海く〜

名所言なところちりけり〜す〜

人形有家

坂名く成なりよけ〜す〜  
坂名く成よけ〜す〜  
坂名く成よけ〜す〜

春浦月はるうらこころんを淡あ休やすけり

家長納末

わに〜らいち〜の浦の春月わよの〜  
わに〜らいち〜の浦の春月わよの〜  
わに〜らいち〜の浦の春月わよの〜

志ますの〜く〜淡あ休やすけり

中務

ゆをいあつゆ〜  
ゆをいあつゆ〜  
ゆをいあつゆ〜

麻用白家言あしな名所月を淡あ休やすけり

正三位家隆

いよの海乃わよの海く〜  
いよの海乃わよの海く〜  
いよの海乃わよの海く〜

藤原光俊納末

すみ海うみら光みつと信のぶ白母しろははのら海乃橋はしの娘むすめの〜  
すみ海ら光と信白母のら海乃橋の娘の〜  
すみ海ら光と信白母のら海乃橋の娘の〜

歌〜人〜人

あ〜い〜名なの橋はしを〜  
あ〜い〜名なの橋はしを〜  
あ〜い〜名なの橋はしを〜

平兼盛ひらかねもりす〜  
平兼盛す〜  
平兼盛す〜

休〜く〜  
休〜く〜  
休〜く〜

らりていふ可<sup>い</sup>するはちのよみありて思<sup>い</sup>を結<sup>む</sup>

家又すま<sup>り</sup>

にわち二ふは親<sup>と</sup>もえ

年<sup>の</sup>い<sup>は</sup>し<sup>て</sup>え<sup>よ</sup>ま<sup>り</sup>我<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>り</sup>と<sup>よ</sup>み<sup>や</sup>ら<sup>る</sup>白<sup>雪</sup>

名所百<sup>の</sup>言<sup>を</sup>な<sup>り</sup>け<sup>る</sup>所<sup>あり</sup>

ほ<sup>に</sup>信<sup>託</sup>宗<sup>宗</sup>

よ<sup>し</sup>ま<sup>り</sup>こ<sup>の</sup>清<sup>し</sup>富<sup>士</sup>の<sup>山</sup>娘<sup>よ</sup>ふ<sup>れ</sup>に<sup>り</sup>ま<sup>る</sup>白<sup>雪</sup>

い<sup>く</sup>〜<sup>い</sup>

相<sup>撲</sup>

い<sup>く</sup>ま<sup>り</sup>さ<sup>す</sup>ら<sup>か</sup>ら<sup>う</sup>と<sup>濱</sup>の<sup>〜</sup>〜<sup>と</sup>入<sup>る</sup>成<sup>両</sup>ら<sup>ら</sup>

百<sup>の</sup>言<sup>を</sup>

ね<sup>ま</sup>松<sup>持</sup>ぬ<sup>前</sup>人<sup>ぬ</sup>大<sup>夫</sup>

あ<sup>ら</sup>〜<sup>の</sup>用<sup>務</sup>〜<sup>り</sup>ゆ<sup>め</sup>の<sup>め</sup>に<sup>し</sup>〜<sup>と</sup>し<sup>は</sup>結<sup>り</sup>京<sup>京</sup>

い<sup>く</sup>〜<sup>い</sup>

小<sup>町</sup>

じ<sup>う</sup>路<sup>の</sup>じ<sup>う</sup>は<sup>の</sup>草<sup>を</sup>我<sup>は</sup>に<sup>は</sup>を<sup>結</sup>入<sup>る</sup>〜<sup>と</sup>〜<sup>と</sup>

讀<sup>人</sup>〜<sup>と</sup>

か<sup>り</sup>〜<sup>の</sup>ま<sup>り</sup>浦<sup>留</sup>を<sup>と</sup>〜<sup>の</sup>ま<sup>り</sup>人<sup>こ</sup>〜<sup>の</sup>流<sup>に</sup>〜<sup>と</sup>

前<sup>大</sup>信<sup>心</sup>道<sup>同</sup>

の<sup>路</sup>〜<sup>の</sup>じ<sup>う</sup>の<sup>ゆ</sup>〜<sup>の</sup>橋<sup>を</sup>〜<sup>と</sup>〜<sup>と</sup>考<sup>察</sup>〜<sup>と</sup>

〜<sup>と</sup>〜<sup>と</sup>〜<sup>と</sup>〜<sup>と</sup>〜<sup>と</sup>

能<sup>用</sup>は<sup>師</sup>

よ<sup>う</sup>〜<sup>の</sup>思<sup>ひ</sup>〜<sup>に</sup>〜<sup>の</sup>雪<sup>の</sup>白<sup>雪</sup>〜<sup>と</sup>〜<sup>と</sup>

天<sup>祿</sup>元<sup>年</sup>人<sup>常</sup>會<sup>悠</sup>北<sup>方</sup>は<sup>屏</sup>凡<sup>三</sup>

清原元輔

つら乃瀆のまことのにくろよき者哉とつと久しう也  
しよ乃かつつけの道ましく月をみく後休け

前大信正慈回

大さけのまは吹凡よ弟達くつとみのしれ月うくも  
録念右大也

録念右大也

考きそいむごつみやんを乃にけつ朽木の松よゆれら白雪  
花さうていくくの考よわめとら朽木の松代谷の埋木  
伊勢の勅使ましく甲賀のじまやよにじさ

赤澤雅経

けらぬ

後京極持政麻衣女也

ちちちなるみり乃きをまにけついで後ゆ思つとの川流  
後人

後人

今さうまゆらどかけのかつれまうさうをえ物も  
寂直法師

寂直法師

こころらきさうのわさ衣袖也我のみく思ふも到る  
ちまの國はゆりけり人よめさ物をくつと

けら

源有教初也

つららちくわこつとの言は短くも年つてきく思ふわりの  
後人

後人

からるく小わかしひるるおしこの國いふことわのさし  
信奥もふ依けるは忠義公のしこし申原<sup>もと</sup>  
依ける  
源信明納札

あましく我のうらまは情をなみけり都立ふはせのそ  
歌——しす  
よき人——と

つとてといひくのはれ者よける草の枝う庭をかつける  
名所うわうこ淡依けるよ  
清補納札

古跡の人よみとるは多みのきくよわこゆるしよのよし  
歌——しす  
祝部成重

心わらあまはしからまよき撫て月をそわす松うし  
寄るあまをよめる  
兼延法師

志山あまはしるる下草よあはれよける家のまよ  
歌——しす  
平政村

又城のまは下<sup>もと</sup>ゆるる夕春も調<sup>なご</sup>よめさる娘<sup>むすめ</sup>か  
天曆<sup>あまのこよひ</sup>し時屏<sup>まが</sup>凡<sup>たふ</sup>言<sup>こと</sup>  
信明納札

じりよわなまよわにめらうしはれまよの雪<sup>ゆき</sup>流<sup>なが</sup>るこは  
百<sup>もも</sup>言<sup>こと</sup>ち<sup>ち</sup>わ<sup>わ</sup>け<sup>け</sup>る雪<sup>ゆき</sup>言<sup>こと</sup>  
大納言師執

かきしとてまよしるる雪のいふにまよわのよ



控申納言國信

わつふつと霧つて我々も一ゆよりみ我れわねいと赤  
百首言うは眺るるのちくつをよきおけり

入道前左殿大夫

つる系波の波にゆかぬの浦の南ののり

歌一しん

七条院大納言

みく田の浦の松れも白草いづくをよね彼の白ゆり

後京極持成家百首言うは草言十こよきおけり

けり

森道法師

凡吹いも向松のの由白草いづくをよきおけり

家日十又三言の淡ゆけりは暁霞陽浦こり

んを淡ゆけり

中院入道右大夫

わらら鳩こしるるあつたるこし八重をこゆる夕霞水

私言所言今に海の色をよきおけり

前内大夫

わら地由ちるは煙をよきおけりをいふ春の舟人

歌一しん

よみ人

志のわら乃煙をよきおけりをいふ春の舟人

一乃煙のわら乃煙をよきおけりをいふ春の舟人

前大臣右大臣



新編松浦の物語はよき世にありてこそよき世の春なりけり  
故山麻のしづかきよき世にありてこそよき世の春なりけり

三信の家

あこちふまのりちやゆ故山は我が世に麻の

妻をこころし

新編撰和詩集巻第二十

雜歌五

源政長胡を此家へ入るる奇談はけり  
初冬述懐のしづかきよき世にありてこそよき世の春なりけり

源俊頼の家

下向しを冬にうしにりやうも此家よき世にありてこそよき世の春なりけり  
木をぬき去りてかきけりこほきけり  
しづかき世にありてこそよき世の春なりけり  
ちりよき世にありてこそよき世の春なりけり  
あこちふまのりちやゆ故山は我が世に麻の

にもしらん うれはせりや わさゆふよ 口の休人志  
我をよむと

反歌

いくつとみまよーまてのまはれの島の物言を聞くを

久世百三十九年

皇太后宮人史後成

まご一思や 下ましよん 凡う一多 吹けり  
しりの笑え 林のたてより 何ゆけま 世よなれ  
そしきぬを 今もこの 下まの 枝も  
しにけりよ しののたを くにむま 春のたま

つせーけり ようの海も 春も人 川のうへ  
つそひく 木の枝 くらゆき けまを  
ぬりを 鳩の外も きこゆなる これを思へ  
あつてー わつた河に うれをを みらさ  
じりたまの 志にうらま しくし乃 みるまわね  
あけこに言 かなさる家 力のりしを 思ひか  
ふしりたま 春のつらみ 松の冬も いま  
すゑふれや 心乃夏をみ けくち みるま  
志にえま 志のた休の こまれけ いうれ  
うらるく 春のてしに けくち みるま

うらこまら みるの志草 ねいもそく 春代ひつらに  
しとくをく 娘はつら身の うへねのみ ぶけの神を  
いつくねを 同人とるさ 陽のしよ ち成有明の  
月のをを 西にしふよ ぬ、先ても 思ふあつら  
かかうねの ゆるさるを せ乃けのね のこえまて  
あやるねよ <sup>いふ</sup>あふれしと けのくあ のわの志草  
かつすてく ときいよのを ちりあを 序うけ流れ  
ゆらうへ 虫くさみよの うらこまら 入江のそく  
うらこまら ちゆえわに みる乃く 思ふあつら  
みとれけ 思ふあつら ちゆえわ

反歌

うらこまら のうらこまら 清うらこまら 思ふあつら

清浦切巻

わらわらふ うらこまら のわらわら けのわらわら  
すくうら けのわらわら けのわらわら 世もわらわら  
あまのけ けのわらわら のゆくまを 成あつら  
ねりねに ちよよ一か かくむ乃 陽のあつら  
いつくね ちよよ一か けのわらわら ねのわらわら  
くらわら 谷のわらわら ちよよ一か 思ふあつら  
くわらわら 末の世も ちよよ一か うらこまら

中身ゆ ことごとく母の ぶつらま ぶつあわねは  
きくわさ乃 上じり思ひ しくもく 又たホク我  
ゆく氷ま わさぶらよ 留りしり こそわにち  
くらもよい りもわ思 伊世の海大 ありのうま  
うらこ世に うらこ世に 下うらこよ

と西門虎音也

春ももふ 故いよみらの いちくよ くらまほさ  
すくきも 凡よ思わ ちりくを 思ひよつて  
ちよしを 止るよえし 寸じ月志 うち世よら  
友ら〜〜 あり我くこ かりしよ じよ我老こ  
ちりも〜 共くの年ハ ちりみ の ちるこ心の  
ひる地を ちるよ思 水のおとの うちこよ  
投る〜思ふ

檀中納言通後かじりの家ゆ〜旋頭言後

休けりよ思のんをよえら

後頼朝也

片我るぶをおまひわりのうらみじりあまのいぢ  
口うらまのうらまをおまきうら

家よん〜留う〜む〜旋以言後休けり  
操のんをよえら 藤原朝徳朝也

卓函くくゆのなごりい交袖しりりいよ

百三言をける様の言

清補納夫

ねるのししうららひりあわておとひる  
ちうやいもつあよみゆし

物名

つししを後付け

伊塔

凡しと鳴りうのまにすううじをよこす

志が

うをがし袖をよこすてねる泪のまはぬ

いあう

躬恒

年よわいゆれよきよをまへるをまへる

おししき

あはるうにむしきううにむのあはる

くしり

二条を身入后大貫

救るわうるくしりうてあまのくひは

すこれけ

凡るくしをわらうし我がすくえうたをのり

フッフッフ

後中納言定頼

まろり清るしきしきをしてフッフッフあはれ切らん道

ららら花

後中納言

ららら花らら花してさしつらにけりか敷中ららら花

ららら花のさしつら

わらわら花のさしつら花の雪にまららら花ららら花

久世百ららら花

人故中門右人老

大井何ららら花ららら花のさしつら花ららら花

ららら花

左京右大臣

つげ花ららら花のさしつら花ららら花

ららら花

清輔朝臣

じらら花ららら花のさしつら花ららら花

ららら花

花園左大臣家小入進

おのれららら花ららら花のさしつら花ららら花

ららら花

後三位頼政

しらら花ららら花のさしつら花ららら花

ららら花

後

あらら花ららら花のさしつら花ららら花

ららら花

後

後徳大寺大老

みまじしししししししし吹波凡よきまの松の流マコト

きまじ乃し

殷富門地人捕

子衣一の留のつらよ深くき乙野し乃春ふかつて雨は

錦のちす留を流ち 源有仲

じうよ一この里にわ我よけき海第のを鴨のつんよ

よきつと野の美こいふしと人のくもせはける

鴨之兼

くまじ一穿の野しは野わし切言まろくを床をく也

考に我くよはけ我に控大納言云實洋よい

りけ

後頼朝長

らりあかそのふ田にくさきまろくを志をわ我

也いよきくつて雨くせくくくくくくくくく

しるまこころいあけ

堀河地中野野人頭く殿とにさあしんけふ

朝出とねてこいこくこのもをくい

うつよよあに共とくはけ我にけつあつ

つし

控中納言後忠

こくまじしししししししししししししししししし

橋廣房

世に<sup>よ</sup>い<sup>ふ</sup>る<sup>に</sup>一<sup>つ</sup>る<sup>に</sup>谷<sup>の</sup>水<sup>の</sup>し<sup>り</sup>く<sup>も</sup>白<sup>の</sup>下<sup>の</sup>枝<sup>の</sup>  
清<sup>見</sup>こ<sup>る</sup>一<sup>の</sup>し<sup>を</sup>後<sup>休</sup>け<sup>ら</sup>

後京の結納也

毛<sup>の</sup>ふ<sup>あ</sup>く<sup>か</sup>し<sup>道</sup>走<sup>の</sup>ら<sup>く</sup>思<sup>奉</sup>つ<sup>く</sup>也<sup>白</sup>玉

唐<sup>中</sup>の<sup>表</sup>あ<sup>ら</sup>り<sup>草</sup>を<sup>折</sup>ち<sup>よ</sup>後<sup>休</sup>け<sup>ら</sup>

二条右皇太后<sup>大</sup>貳

あ<sup>か</sup>き<sup>八</sup>重<sup>乃</sup>を<sup>流</sup>し<sup>や</sup>あ<sup>子</sup>く<sup>る</sup>く<sup>る</sup>く<sup>る</sup>く<sup>る</sup>

伊<sup>又</sup>な<sup>る</sup>も<sup>の</sup>う<sup>く</sup>後<sup>休</sup>け<sup>ら</sup>

あ<sup>わ</sup>く<sup>し</sup>よ<sup>今</sup>い<sup>ら</sup>る<sup>の</sup>様<sup>を</sup>代<sup>り</sup>の<sup>末</sup>と<sup>て</sup>贈<sup>る</sup>も<sup>今</sup>

春<sup>乃</sup>初<sup>も</sup>定<sup>家</sup>よ<sup>あ</sup>い<sup>く</sup>後<sup>休</sup>け<sup>ら</sup>に<sup>か</sup>く<sup>も</sup>

僧<sup>正</sup>を<sup>實</sup>に<sup>り</sup>う<sup>く</sup>と<sup>て</sup>よ<sup>か</sup>り<sup>を</sup>と<sup>り</sup>

春<sup>の</sup>う<sup>後</sup>く<sup>は</sup>よ<sup>を</sup>く<sup>と</sup>後<sup>休</sup>け<sup>ら</sup>の<sup>ん</sup>

よ<sup>ま</sup>し<sup>こ</sup>申<sup>て</sup>後<sup>休</sup>け<sup>ら</sup>

大僧正親嚴

初<sup>子</sup>日<sup>に</sup>う<sup>ら</sup>み<sup>あ</sup>ら<sup>し</sup>の<sup>人</sup>は<sup>お</sup>ね<sup>よ</sup>

あ<sup>ら</sup>み<sup>こ</sup>ら<sup>み</sup>



貞永元年六月十三日 奉依昨日承旨先奉用白殿今日不奉日殿半早

春日所來觸火早不奉由被作仍容日 毛車註明義無名神仙門者殿上外座

以中將 登飛架 出上戶相觸 氣之由奉付內侍卷 惟也承

劫由出作云古、今乃予撰以進言之也 正第米之福 惟音 費者退均指 匪也今日故

漢筆書十卷之草案之端 同十月二日雖撰予未調 假右序代并二十卷端目

錄注一紙 元紙如 先內覽即奉 夙作者位著已不用 七日奉覽之由同卷之

天福元年九月十八日忽遭天下之悲歎 又依老病之相後十月十日申入子細已出

俗塵託進 銑之奉性懈怠不及 疎唐送旬月之間二年九月密下 給沖製五首 付內侍

飲感之間十卷草案 序將予進入 沖一見之後 即予被退下之由 被作下之難入之辨 紙之紙自

筆跡表紙 青房物表唐後 叙叙軸 摺卷宗凡 當持一折 裁予一千四百九十八首 後檢選佳例 罷

沖製今二首了 滿五百首之由 上奏之

豈計技事之歎 徒注若格之雲 空新於今者 無所期 所殘之草 急燒弄之

及十月下旬不慮之外 舊院之草案 自大嚴被尋 予十一月月上旬 頻有白九日奉 上撰進

古予亦殊 預沖減言 於持輩 予有承旨 亦

同十日更給之際 弄百金首進上之所 備置之清書 紙紙 用主載 氣之時 入宮 嘉增 劉進之詞

十五日移下 清事之人 院

文曆二年三月十二日 清書進覽之傳 閱之

草予去年內 上進入之 持所 未多之 切弄 予亦 摺除 託其 用文之 跡 甚 見 若

永不下他見

寬元二年正月九日

滿葉集

古今 醜明 友別 莫之 躬恒 志奉

後撰 村上 長能

檢送 花山

後撰 白竹 清保

今業 日 後賴

朝尋 宣德 清補

千新 後白竹 信成

新奉 後鳥羽 道真 有家

新勅 後隆行 宣家 家隆 雅經

以集以定家以志更分石丸法院通石丸口被陳官宿草申出必形全書馬孫安早

慶安二年仲秋下旬

三升山通是

馬其四年正月七日定家以志更分石丸法院通石丸口被陳官宿草申出必形全書馬孫安早

特信法也

扶老眼一復直付多程沈非黑摺者明靜

石丸法院通石丸口被陳官宿草申出必形全書馬孫安早

元祿九年十二月十一日

後通

下

21

